

東洋學藝雜誌第三十七號

蠶蛆ノ發育

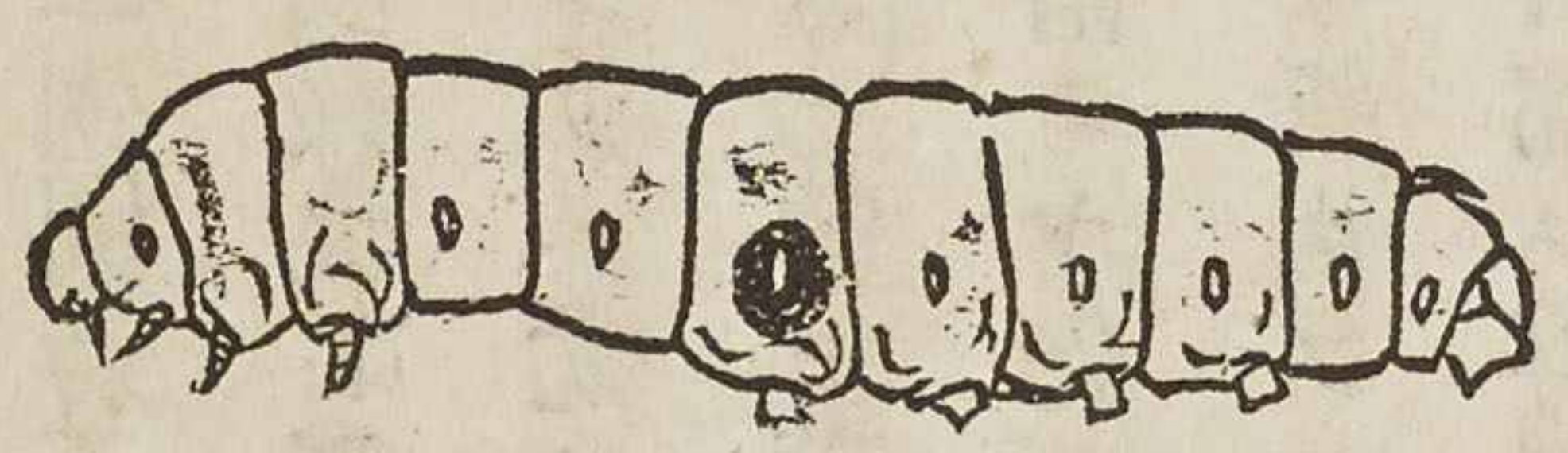
第三回 佐々木忠二郎

蠶兒四眠後營繭ノ期ニ臨テ体軀疲勞シ動止頗ル痴鈍ナル  
 モノ又ハ体軀淡黃色若クハ淡黃褐色ヲ呈シテ次第ニ收縮  
 シ繭ヲ營ム能ハザルモノ(俗ニ「ヂマイ」ト稱フルモノ)又  
 ハ薄繭ヲ營ムト半バニシテ之ヲ辭シ出ヅルモノ又ハ蠶兒  
 繭ヲ營ミタル後チ繭内ニ於テ「タレコ」トナルモノ又ハ繭  
 内ノ蛹灰褐色ヲ帶ヒテ死ニ至ルモノモ大約其神經球ニ蛆  
 ノ寄生ヲ受ケタルモノトス然レモ蠶兒若クハ蠶蛹強壯ニ  
 シテ其神經球ニ蛆ノ寄生ヲ受クルモ其勢力尙ホ衰ヘズシ  
 テ死セザルモハ蛆モ亦培々成育シテ神經球ヲ辭シソレヨ  
 リ体窩ニ出デ脂肪内ヲ過キ蠶兒ノ側面ニ存ズル空氣管若  
 クハ其本幹内ニ侵入シ以テ身ヲ容ル、ノ巢窟ト爲シ其側  
 ニ蛆ハ口ヨリ排出スル亞爾加利性ノ無色液ヲ以テ蠶兒ノ  
 筋肉及ヒ脂肪ヲ纏着シ之ヲ堅韌ニシ猪口ノ狀ヲ爲サシム  
 其猪口ノ底ハ空氣管若クハ氣門ニ開キ又々其開口ハ蠶兒  
 ノ体窩ニ開クチ常トス蛆ハ常ニ其尾端(尾端ニハ氣門ヲ

暇將ニ盡ントスルコトヲ初メ元ノ朝鮮ノ地ヲ踏ムヤ陸軍大

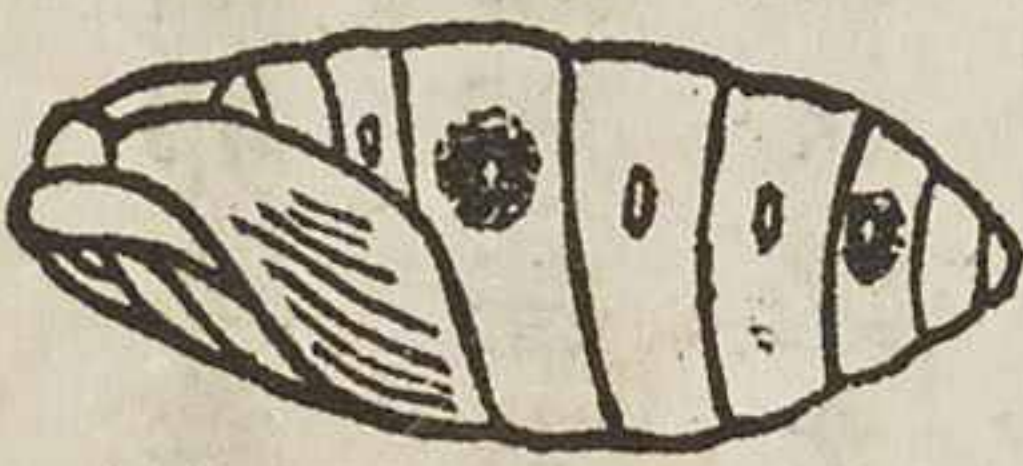
ガ素願ヲ遂ンコトヲ得セシメハ幸甚々々元誠恐誠惶頓首

存セリ)ヲ猪口ノ底ニ接シ以テ蠶兒ノ吸收スル空氣ヲ掠  
 奪シ又々其頭部ハ猪口ノ開口ヨリ蠶兒ノ体窩内ニ出タシ  
 テ脂肪ヲ撮リテ食トナス是時ニ當テ蠶兒若クハ蠶蛹ヲ外  
 面ヨリ見レバ氣門ノ周圍ニ褐色斑ヲ現ハス蓋シ此褐色斑  
 ハ猪口ニ附セル脂肪筋肉ト亞爾加利性ノ無色液ノ作用ト  
 ニ因テ生シ且ツ蛆ノ糞汁ニ因テ生ズルガ如トシ故ニ蠶兒  
 蠶蛹カ氣門ノ周圍ニ褐色斑ヲ現ハシタルハ共ニ蛆ヲ其氣  
 管ニ存スル確証ナリ尤モ氣門ニ褐色斑ヲ現ハスモハ蛆ヲ  
 寄生スルト云フコトハ尋常ノ養蠶家モ能ク知ルトコロニシ  
 テ更ニ耳新シキ事ニハ非ズ(第一圖及ビ第二圖)然レモ是



第一圖

氣門ニ褐色斑  
 點ヲ現シタル  
 蠶兒



第二圖

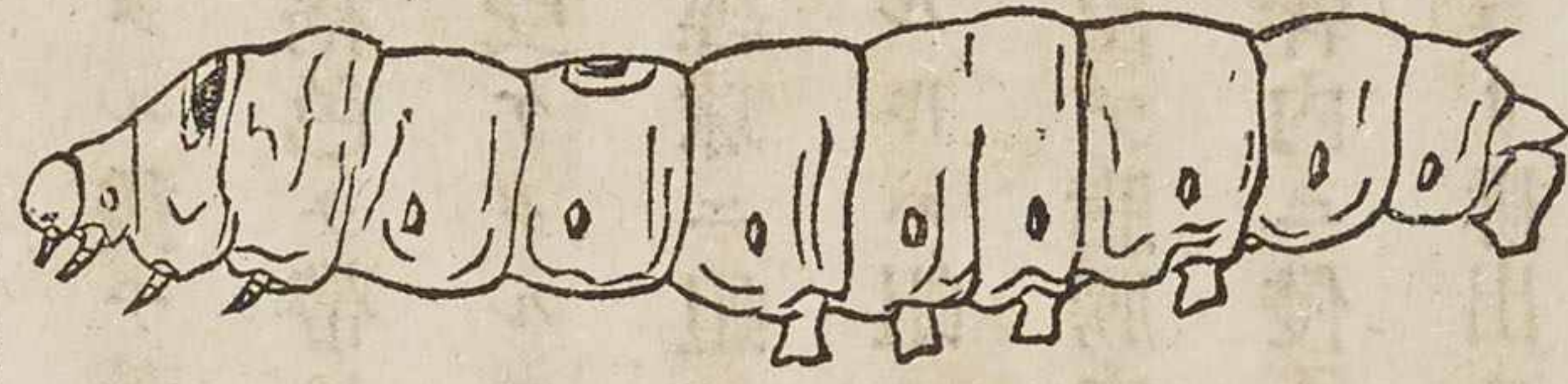
氣門ニ斑  
 點ヲ現シ  
 タル蠶蛹

ノ確証ハ始メ蛆ヲ寄生セシヨリ時日ヲ經過セル時ノ徵候

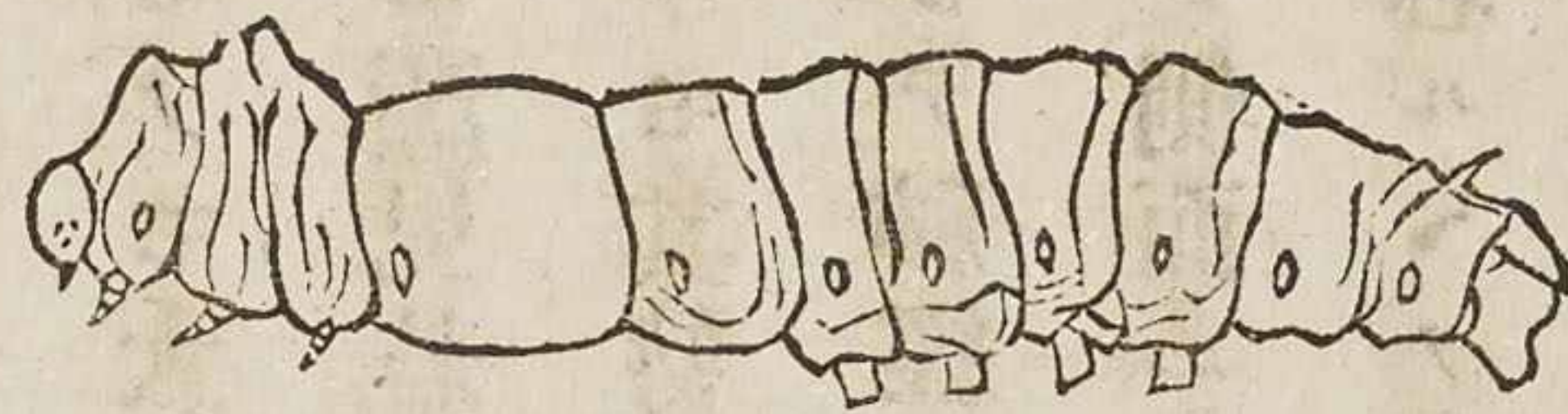


ナレバ「フシユ」コソ始メテ蛆ヲ寄生シタル時ノ徵候ト云  
フベシ（第三及四圖）抑モ蛆ハ大約氣管カ若クハ其本幹上  
ニ製シタル巢窟ニ止マルコ一週間乃至二週間ニノ后チ繭

第四圖



フシダカ



フシタカ

内ニ存スル蠶兒蠶蛹ノ何部ヲ問ハス何處ニテモ之ヲ破リ  
テ排出シ從テ繭ヲ破リ之ヲ辭シ出ヅルモノナリ今マ蛆ヲ  
寄生シタル蠶兒ハ營繭後ハ勿論營繭前トテモ續々老成ノ  
蛆ヲ出スヘキ理ナルニ左ハナクシテ老成ノ蛆ハ蠶兒ノ營  
繭セル後九日目乃至十四日目ニ續々排出スルハ妙ク疑ヒ  
ヲ容ル、トコロナリ然リト雖モ蠶兒三眠以來四眠起マテ  
ニ蛆ヲ寄生シタルモノハ大概營繭前若クハ營繭ノ期ニ臨

ンテ諸病ニ罹リテ死シ又タ四眠起以來之ニ寄生スル處ノ  
蛆ハ二週間乃至四週間ニテ老成スルモノナレバ恰モ蠶兒  
ノ營繭後九日乃至十四日ニシテ蠶繭ヲ破リ匍出スルモノ  
ニ似タリ（尤モ蠶兒四眠起以來ハ蠶卵ヲ吞食スル特ニ多  
シトス）抑モ繭内ニ在ル蚕兒蠶蛹ニ寄生セル蛆ノ老成ス  
ルニ當テヤ先ツ其皮膚ノ何部ヲ問ハス之ヲ破リ出テ、其  
口ヨリ排出スル處ノ無色液ヲ以テ蚕繭ヲ濕ホシ之ヲ和カ  
ニシ口部ニ存ズル又狀ノ齒ニテ其濕ヒ和キタルトコロノ  
繭絹ヲ搔取リ此ニ少ク小孔ヲ穿ツコトヲ得バ則チ之ヨリ頭  
部ヲ出シ頻ニ頭部ヲ回旋シテ遂ニ其身ヲ繭外ニ出ス（第  
五圖）其性タル頗ル活潑ニシテ動止尤モ速カナリ其長ケハ  
五分強幅ハ二分強ナリ（第六圖）體軀ハ十二個ノ環節ヨリ  
成リテ白黃色ヲ呈シ環節上ニハ各々數條ノ橫皺ヲ具ヘ且  
其側面ニハ數條ノ縱皺ヲ具ヘタリ頭部ハ銳尖ニシテ尾部  
太ク脚ヲ有セザレバ移動スルニハ每環節ニ存ズル筋肉及  
ビ刺毛ト口部ニ存ズル又狀ノ齒ヲ以テス又タ頭部（體軀  
ノ第一環節）ニハ二個ノ凸起物アリテ其頂部ニ二個ノ褐  
色點アリ之ヲ顯微鏡ニテ視察スレバ兩點共ニ褐色ノ環ヨ

リ成リテ環ノ中央ハ妙ク凹ミタリ此兩環ノ根部ハ皮膚内

這入ルヲ常トス若シ右ノ場所ニ這入ルコトヲ得バ體軀收縮



ニ蛆ヲ寄生シタルモノノ大概營繭前若クハ營繭ノ期ニ臨

色點アリ之ヲ顯微鏡ニテ視察スレバ兩點共ニ褐色ノ環ヨ

リ成リテ環ノ中央ハ鈔ク凹ミタリ此兩環ノ根部ハ皮膚内ニ在リテ共ニ合シテ一個ノ橢圓囊ト爲レリ其作用ハ如何ナルモノカ未タ之ヲ認定スルコト能ハズト雖モ或ハ眼ノ作用ヲ爲スモノナラント考察ス又タ第二環筋ト第三環節ト

オ五圖

蛆 蠶繭ヨリ出シトスル



ノ接線ニモ二個ノ褐色點アリ

之ヲ顯微鏡ニテ視察スレバ每

點各々皮膚ノ腫起シタルモノ

ニシテ之ニ褐色ヲ帶ビタル五

個ノ開孔ヲ存ズルナリ開孔ハ

盡ク腫起内ニ於テ相合シテ共

ニ一管ト爲リ其根部ハ頭部ニ

存ズル空氣管ニ通シタリ故ニ

大氣ヲ呼吸爲スノ開口ナルコ

ト

亦疑フ可キニ非ザルナリ而シテ蛆ノ尾端ハ恰モ圓筒ヲ切

リタルガ如クニシテ肛門ト二個ノ氣門トヲ具ヘタリ氣門

ハ褐色ノ革質圓板ノ中央ニ開キ頗ル堅牢ナルヲ以テ外衝

ヲ受クルモ敢テ傷クコトナシ凡ソ蛆ハ蚕繭内ヨリ出ヅルヤ

直チニ室隅若クハ陰鬱ノ場所ニ這入り特ニ好ンテ土中ニ

オ六圖



蛆



蛆

這入ルヲ常トス若シ右ノ場所ニ這入ルコト得バ体軀收縮

シテ圓筒形ノ蛹トナリ次第ニ赤色ヲ帶ビ從テ濃褐色トナ

リ遂ニ變シテ黑色トナル(第七圖)

○

法國マリヨン氏教育學講義

中川元譯

教育ハ余輩之ヲ目シテ以爲ク是レ一ノ學ナラス即チ一ノ

術ナリト何ソヤ實際ヲ主トスルモノナレハナリ而シテ其

窮ムル所ノ物質錯雜紛綜ヲ極ムルヲ以テ術中ニ於テモ最

モ至難ノモノト言ハサルヘカラス蓋シ世ノ諸術中其錯綜

ヲ極ムルモノ政略ヲ除クノ外唯此教育術ヲ以テ其最トス

カント曰ク人間動作ノ間最艱最難ト做スヘキ者特ニ二ア

リ曰ク政府ノ術ナリ教育ノ術ナリト而シテ所謂物質トハ

兒童ノ身體精心感情性質等ニ係ルモノ是ナリ是レ動物上

ノ人間ニ汎涉スルノミナラス殊ニ精心上ノ人間ニ關スル

モノ最モ深ク幼心中ニ於テ既ニ成人ノ自由心トナルヘキ

萌芽ヲ包藏シ瞬間モ活動セサルコトナク生長セサルコトナク

心身共ニ發生シテ息マサルナリ而シテ其將來ノ自由心ト

ナルヘキモノ、如キハ或ハ之ヲ抑制シ或ハ之ヲ尊重シテ



以テ之ヲ舒長セサルヘカラス性質ハ之ヲ弱メス碎カスシ  
 テ能ク之ヲ陶冶シ精心ハ之ヲ隸セス奴セスシテ能ク之ヲ  
 養成シ感情ハ能ク之ヲ抑制シテ又能ク之ヲ虚飾セサラシ  
 ム

英國ノ一學者ハ政略ヲ以テ將棊ノ技ニ比擬シテ以爲ク夫  
 ノ棊子ハ各自其情慾意思謀略等ヲ有スルモノナルヲ以テ  
 當局者特ニ敵手ノ計略何レニ出ルヤヲ知ラサルノミナラ  
 ス我棊子ト雖モ亦且ツ頼ムニ足ラスト乃チ曰ク汝ノ飛車  
 ハ竊ニ自己ノ位地ヲ轉シテ他ニ移リ汝ノ角將ハ汝カ運用  
 ノ巧ナラサルヲ憤リ私ニ步兵ヲ欺イテ守地外ニ放チ其歩  
 兵ハ卒伍ニ班スルノ故ヲ以テ汝ヲ惡ミ守地ヲ去テ却テ汝  
 カ敗北ヲ喜フニ至ル蓋シ此ノ如キ場合ニ於テハ汝カ深遠  
 細密ナル謀慮計畫モ忽チ水泡ニ屬シ竟ニ我棊子ノ爲メニ  
 敗ヲ取ルノ外ナシトス嗚呼是レ畢竟汝カ傲然數學的ノ演  
 繹法ノミヲ信シ我棊子ヲ蔑視シテ其情慾如何ヲ顧ミサル  
 ニ由ルモノニ非スヤ一敗塗地ノ數ニ遭遇スルモ亦宜ナラ  
 スヤト  
 教育ノ事ノ如キハ固ヨリ未タ如此ク言フヲ得サルモノア

リト雖モ亦其不意ニ出ル事常ニ多ク且ツ其籌算計畫屢々  
 當ラサルヲアリ蓋シ其成功ハ管ニ吾人ノ智巧ト熱心トノ  
 ミニ屬セス又將タ生徒ノ柔順ニモ屬セスノ實ニ諸種ノ原  
 因ト諸種ノ場合ト機會トニ頼ルモノナリ此原因場合機會  
 ハ「ユラボラトウルヲツキユルト」蔽ハレテアル手  
 傳人ト云フ義ト稱呼

スル者ニシテ是余輩カ爲ニ平常知ラス識ラス利トモナリ  
 將タ害トモナルモノナリ夫此ノ如ク陰微ナル事業ニ於テ  
 余輩チ薰陶誘導センニハ何等ノ理論ヲ以テ足レリトスヘ  
 キヤ如何ナル學ヲ以テカ忍耐勤勉巧手威風熱心等ノ數者  
 ヲ補充満足スルヲ得ヘキヤト言ハ、余輩ハ即チ教育ハ一  
 ノ學ニハアラスト白狀スルノ外アラス是レ畢竟白狀ニハ  
 アラスシテ自カラ事理ノ然ラサルヲ得サルモノナリ蓋シ  
 教育ハ我靈魂ヲ以テ他ノ夥多ノ靈魂ヲ制御スル活物有形  
 的ノ術ナルヲ以テ固ヨリ一定ノ模型ニ依リ其目的ニ適恰  
 ナル抽象法式ニ嵌着スルヲ能ハサルナリ  
 今夫レ智識ヲ與ヘテ精心ヲ整備スル學校教育ノ一部ト雖  
 モ獨リ學問ヲ有スルノミニテハ未タ充分ト云フヘカラサ  
 ルハ是理ノ賭易キ者ナラスヤ且ツ夫ノ理學ヲ教授スルカ

如キ其學其物ノ外別ニ要スルモノアリ即チ數學教課ニ至

セテコレ無シトスルモノ果シテアリト云フヲ得ンヤ而シ



教育ノ事ノ如キハ固ヨリ未タ如此ク言フヲ得サルモノア

ルハ是理ノ踏易キ者ナラスヤ且ツ夫ノ理學ヲ教授スルカ

如キ其學其物ノ外別ニ要スルモノアリ即チ數學教課ニ至  
ルマテ術ニ須ツ所アルモノ是ナリ是其實ニ於テ學ト術ト  
殆ト相混淆錯雜スルヲ以テ先ツ數理ヲ明瞭ニシテ證據ノ  
順序ヲ立ツルニアリ教育ノ事ノ如キハ襁褓ノ裏ニ始マリ  
以テ其人一人ヲ完全ニ養成スルヲ期スル者ナルヲ以テ或  
ハ智ヨリモ一層情意ヲ育成シ天ノ賦性ヲ獎勵シテ生來ノ  
精心ヲ正シウスル習慣ヲ養ヒ人々固有ノ性ヲ存セシメテ  
善良可愛ノ風ヲ誘起ス是皆教育ノ術ニシテ確トシテ教フ  
ヘカラス又習フヘカラサルモノナリ是故ニ該博大ル哲學  
者モ此術ニ於テハ或ハ拙陋ニシテ失敗スルヲアリ而シテ  
文盲ナル母ニ在テ却テ夫ノ諸種ノ解剖及ヒ諸種ノ教育ヨ  
リモ確實ナル一ノ偶性アンスタクニ依テ能ク其術ヲ遂成スルヲアリ  
然レトモ教育ニ於テハ情ト感應ト相働クモノナルヲ以テ  
教育ハ唯此情ト感應トノミニ依ル者ト言ハンカ又教育ハ  
一ノ學ニ非スシテ習學外ニ於テ之ヲ求ムル者ナルガ故ニ  
教育ノ依ルヘキ學ハ一モアルコトナク隨テ習學ヲ要スル者  
ナラスト言ハンカ蓋シ之ヲ事實ニ徵スルニ凡ソ諸術ノ中  
ニ就テ教フヘキ者モ尊信スヘキ原理モ識ルヘキ法則モ併

セテコレ無シトスルモノ果シテアリト云フヲ得ンヤ而シ  
テ此原理法則ハ天稟ノ英才或ハ獨リ能ク之ヲ悟リ得ト云  
ハンモ尋常ノ人ノ如キハ力メテ之ヲ習得セサルヘカラス  
且ツ夫レ教育ノ事業ハ總テ諸種ノ理論ニ涉レリ諸種ノ理  
論ニ涉ルト云フモノ即チ自カカラ業ニ己ニ因ル所ノモノニ  
シテ又普及セシムヘキ實理ナルニ非スヤ故ニ其實理ノ何  
物タル所以ヲ述フルハ敢テ無益ノ事ニアラサルヘシ是レ  
徒ニ教育學ノ弊ヲ懼レテ竊ニ隱蔽スル所アラントスルニ  
ハアラサルナリ余ニ於テハ教育主說ハ基本ノ點ト既ニ教  
育ノ大切ナルヘキ證左ヲ認得スルモノアリ夫ノ教育ハ功  
ヲ奏セヨト述ヘ又ハ偽勢ヲ張ルカ如キハ決シテ之ヲナサ  
スト明言スルノ類其說愈々高ケレハ其効用亦益々大ナル  
ヘキナリ  
余輩カ此ノ如ク白狀スルニ於テハ人或ハ此白狀ヲ以テ矛  
トナシ以テ攻撃ヲ試ル者アラン蓋シ此教育學ニ在テ確乎  
不拔ナル法則ヲ與ヘ得スト云フ短處アルコトヲ辯明スルニ  
二個ノ說アリ其一即チ或者ハ此短處ヲ以テ其物質ノ錯雜  
紛綜ト余輩カ未ダ教育術ノ濫奧ヲ盡シ得サルノ無識トニ



歸シ之ヲ以テ全ク一時ノ欠典ト認メ此無識ハ後來教育術ノ進歩ニ從ヒ早晚全ク消滅スルノ日アルヘク隨テ其實際ノ蹉躓モ漸ク其跡ヲ絶ツニ至ルヘシトス此ノ如ク思考セラル輩ニ在テハ教育術ニ欠典アルヲ白狀スルモ猶ホ恬トシテ教育學アルヲ認ムル者ノ如シ然レトモ其期望ニ依リ其蘊奧ヲ究メントスルニモアラス其知ラサル者ハ知ラストシテ更ニ他ニ求ムル所ナシ

其一即チ余輩ト說ヲ同シウセル者ノ如キハ其白狀上前ノ或說ニ比シ來レハ更ニ一層ノ障礙ヲ加ヘサルヲ能ハス抑教育ノ上ニ覆ヒ來ルモノニ於テハ一般人ノ意思ニ關スル術ノ如ク曖昧ノ原因中ニ在テ自然ニ自由心ノ領スル部分アルヲ認ム然ル以上ハ此ノ曖昧ナルモノハ素ヨリ一時ノモノトナスヲ得スシテ到底明瞭ニナスヘカラサルモノナリ但其曖昧ハ極メテ之ヲ減省セシメントヲカムヘシト雖モ豈能ク之ヲ全滅シ得ヘケンヤ何トナレハ其施術者ノ本按ニ於ル其大部分コソ機械トモ云フヘケレ然レトモ其全體ヲ稱シテ未タ之ヲ機械ト稱スヘカラサレハナリ諸君ヨ余ハ爰ニ唯此問題ヲ指示スルニ止マルノミ固ヨリ

此問題ニ於テ主說上能クコレカ解釋ヲナスヘシト誇言スルニハアラス然リ能クコレヲ誇言セサルモ余輩ハ先第一着ニ説明ヲナシ判然コレカ區別ヲ施ス程ノ點ニハ達セントス蓋シ此ノ如キ問題ノ此ノ教育學ノ範圍ヲ窺フニ於テハ其解説ノ如何ニ依リテ教育學ノ成立スヘキヤヲトスルヲ得ヘキ事實アルニ依リ則チ余輩カ教育主說上思考スル所ト最モ重大ナル關係アリ乃チ余輩ハ先自說ヲ定メントス其主說ハ之ヲ要スルニ高尙ナル哲學ニ相關係スルモノナリ蓋シ兒童ノ統御家庭若クハ學校ノ紀律性質ノ陶冶斯ノ如キ事項ハ實地ノ事業ニシテ外貌ニ就テ之ヲ見レハ瑣細ノ事ノ如キモ余輩ハ之ヲ解シテ元來人生大問題ノ哲學ノ範圍ニ歸スルモノナリト言ハザルヲ得ス

然レモ余ハ此問題ニ於テ其兩端ヲ叩イテ之ヲ盡スヘシトモ言ハス又其研究ヲ姑ク遲緩セシムヘシトモ言ハス唯余ハ其何物タルヲ究知シテ見解ヲ起サンコトヲ欲シ漫然看過シテ胡亂ニ說去ルヘカラスト言ハンノミ何トナレハ教育場中己ニ一隅ヲ占得スル以上ハ其問題ヲ以テ範圍外ニ逐フカ如キハ即チ之ヲ解釋スル者ナレハナリ抑教育ナルモ

ノハ其原質ニ就テ之ヲ見レハ實地ノ物ニアラスシテ常ニ

考定スル人間諸種ノ行爲トニ屬セズト云ハンヤ今一點ヲ



諸君ヨ余ハ爰ニ唯此問題ヲ指示スルニ止マルノミ固ヨリ

フカ如キハ即チ之ヲ解釋スル者ナレハナリ抑教育ナルモ

ノハ其原質ニ就テ之ヲ見レハ實地ノ物ニアラスシテ常ニ  
一般社會ノ有様及ヒ人間ノ性質運命等ニ依リ當否ヲ論セ  
ス之ヲ考察スルモノナリ故ニ之ヲ事實ニ徵スルニ教育學  
ハ常ニ哲學說ノ感觸ヲ受クルノミナラス即チ其世々ノ哲  
學說ノ生産物ト稱セシモ不可ナカラン蓋シ教育主說ノ歷  
史ハ哲學史ノ補充物ナリ上世プラトン及ヒアリストート  
ヨリ今代カント及ヒペンサー氏ニ至ル迄哲學諸大家ハ皆  
教育上ニ就キ各々意見アリ余以爲ク教育固ヨリ其主說ナ  
キニ於テハ誰カ之ヲ深思考究スル者アラント而シテ余輩  
カ曩ニ我隣國ニ行ハルト稱セシ教育學講義ノ基礎トスル  
所ハ何處ニ在リヤ是哲學家ノ思考ヨリ得タル者ナリ即チ  
日耳曼ニ於テハカントヘルバルト及ヒベネーノ思考ヨ  
リシ英國ニ於テハベーコン及ヒロツクノ思考ニ因リ近代  
ノ哲學者之ヲ修正セシモノヨリシ又何國トナシルニソ  
ノ思考ヨリセリ  
果シテ然ラハ何スレヲ前ニ言フ所ノ如クナラスト言フヲ  
得ンヤ且ツ其人ヲ發育シテ其目的ニ達セシメンコトヲ主ト  
スル術ハ何スレヲ余輩カ視ル所ノ宇宙間ノ有様ト余輩カ

考定スル人間諸種ノ行爲トニ屬セズト云ハンヤ今一點ヲ  
摘テ之ヲ言ハンニ元來社會ニ伍スルノ性質ナル人間ヲ以  
テ其生活ニ準備セシムル目的ナルモノナレハ教育家タル  
者ハ或ハ其偶然ニ出ツルト又ハ其熟考ニ出ツルトヲ論セ  
ス現今ト將來トニ關シ社會人事ノ關係ハ果シテ如何ト云  
フノ點ヲ考察セサルヘカラサルハ固ヨリ論ヲ埃タサルモ  
ノナラスヤ然リ而シテ我此教育學ハ我社會ト心裡トノ想  
像ヲ以テ曾テ哲學上講明スル所ニ反射映出セシムルヲ免  
ルヘカラサルモノトスルモハ何ヲ此業ヲ以テ偶然ノ暗索  
ニ歸スヘケンヤ能ク其理ヲ考究シテ此想像ヲ紛綜誤謬ニ  
陷レス明カニ其進路ヲ計畫セサルヘカラサルナリ  
○  
讀谷本瑛氏之競爭併進說(續稿) 清野勉  
又次ノ段落ニ至リテハ文理滅裂ヘツケル氏ノ意見ヲ贊成  
スルカト思ヘバ片言隻辭ノ斷リモナク其末段ニ至リ突然  
其ノ贊成スルハ谷本氏自家ノ贊成ニアラズシテ世上一般  
ノ進化主義家ノ贊成ナルガ如クニ說キ放タレタリ實ニ亂  
雜ヲ極メタル論シ方ト云フベシ且谷本氏ハ同斷落ニ於テ



社會ノ強弱ハ人民ノ強弱ニアルコトヲ説キシガ爲メ何ヲ若シミテ社會ノ強弱ハ人民心身ノ強弱ト一致スルトハ云ハテコトサラニ身体ノ強弱ト一致スルト説キ心身聯繫ノ定則ヲ揚ケ來リ精神力ノ部内ニ於テハ間接ノ證左ノミヲ以テ足レリトスルカヘツケル氏ハスパルタノ場合ニ於テハ身体羸弱ナル小兒ヲ殺シ云々ト云ハレタレト醫學進步ノ場合ニ於テハ体力ニ關スル疾病或ハ此疾病ヨリ來タリテ間接ニ精神ニ波及スル疾病ノミナラズ直ニ神經系統ヲ侵撃スル精神病ヲ説カレタルニアラスヤ」又谷本氏ハ同段落ニ於テ得々然タル顔色ヲナシ某碩學ハ社會ヲ以テ一個ノ人体ニ擬シ其社會内ニ棲息スル民生ヲ以テ人体循環ノ血液ニ比シ云々ト云ハレタレト某碩學トハ日本ノ碩學ナルヤ將或ハ泰西ノ碩學ナルヤ若モ日本ノ碩學ナレバイザ知ラズ萬一泰西現今ノ碩學ナランニハ社會ヲ以テ一個ノ人体或ハ更ニ嚴密ニ語ルルハ一個ノ有機體（ナルガニスム）ニ擬スルハ勿論ナルベケレト其社會ヲ以テ構造スル人々ヲ以テ一個ノ有機體ヲ構造スル各自ノ細胞ニコソ比スベケレ其血液ニ比スルニ至リテハ碩學ノ名稱ヲ冠スル

モノハ他ニアラス一個ノ細胞ハ實ニ儼然タル一個ノ生物

ニ足ルホドノ人材トモ思ハレサルナリ何トナレバ社會ハ人生ノ團合体ニシテ此ノ如キ團合体ノ外一切無一物ナルニ體ト血液トノ關係ニ至リテハ其致大ニ異ナリ假令其ノ體ヲ構造スル細胞ハ之カ榮養ヲ血液ニ資ルト雖細胞ハ細胞血液ハ血液ニシテ血液ノ外尙其殆ト體ノ全部ヲ組織スル所ノ細胞（血液ヲ除キテ云フ）アレバナリ此細胞ハ社會ニ於テハ何物ト較ブベキヤ是レ豈頗ル失當ノ譬喩（アナロジ）ナラスヤ」現今泰西ニ於テ碩學トモ稱スベキ有名ノ學者ハ社會ヲ以テ一個ノ有機體ニ擬スルノ段落ハ既ニ飛ビ越へ過ゴシテ尙更ニ勇進シ社會ヲ以テ直ニ有機體ナリト斷言シテ毫モ疑ハザルモノアリ而シテ其ノ之レヲ斷言スルヤ社會ヲ構造スル各自一箇ノ人々ヲ以テ有機體ヲ構造スル各自ノ細胞ノ地位ニ置キ此ノ數萬ノ細胞カ有機體ノ一局部ニ結聚シテ造形スル所ノ器官（ナルガン）ヲ以テ社會ニ生存スル衆多ノ人々相組合フテ造形スル所ハ農工商等局部ノ團合体取リモ直サス小社會即チ（クラツス）ハ地位ニ置キ以テ社會學大本ノ基礎ヲ建築スルハ人是レアリ其一箇ノ人々ヲ以テ一個ノ細胞ノ地位ニ置ク所以ノ

ガル、ヂヴィシヨン、ヲフ、レ、ボー、ル）ノ一大天法モ社會



スベケレ其血液ニ比スルニ至リテハ碩學ノ名稱ヲ冠スル

モノハ他ニアラス一個ノ細胞ハ實ニ儼然タル一個ノ生物  
 ニシテ一個ノ人ト同シク榮養蕃殖運動ノ三大生活作用  
 ヲ具有スレバナリ其局部ニ組ニ合フテ造形スル所ノ小社  
 會ヲ以テ器官ノ地位ニ置ク所以ノモノハ他ニアラズ凡ソ  
 有機体ノ器官ハ右ノ三大生活作用ヲ具有スル細胞ノ衆多  
 相集リテ造形スルノ狀同シク此ノ三大生活作用ヲ具有ス  
 ル衆多ノ人々相組ニ合フテ小社會ヲ造形スルノ狀ト毫モ  
 異ルヲナケレバナリ終リニ至リ右ノ小社會ガ團合シテ造  
 形スル所ノ尋常ノ社會ヲ以テ直ニ斷言シテ一個ノ有機体  
 ト云フモノハ他ニアラズ凡ソ一個ノ有機体ニアリテ其諸  
 器官ノ間ニ行ハル、生理的官能ノ關係ハ尋常ノ社會ニ於  
 テ其許多ノ小社會ノ間ニ行ハル、分業ノ關係ト全ク致ヲ  
 一ニスレバナリ」蓋此ノ如ク説キ來タリテ以テ始メテ彼  
 ノ有名ナルアダム、スミス氏ガ夙ニ經濟學ノ境界内ニ孤  
 立シテ説定セシ分業法ノ一大原理モ生物体内ニ行ハル、  
 自然的ノ生活官能ト氣聲ヲ通シ以テ益々其光輝ノ爛然タ  
 ルヲ覺エ此クノ如クニシテ以テ始メテミルン、エドワー  
 ド氏ノ生物体内ニ於テ論定セシ生理的分業（ヒシヨロヂ

アリ其一箇ノ人々ヲ以テ一個ノ細胞ノ地位ニ置ク所以ノ

ガル、ヂヴィシヨン、ヲフ、レーボール）ノ一大天法モ社會  
 ノ内部ニ行ハル、自然的ノ缺クベカラザル大作用ト脈絡  
 相貫キ以テ無限ノ風致ヲ添ユルニ至ルナリ特リ此ノミナ  
 ラス此ノ説タル余輩ガ常ニ研尋セントスル進化ノ大主  
 義ニ至大ノ關係ヲ有スルモノナリト雖一朝一夕ノ能ク懇  
 論シ去ルベキ所ニアラザルヲ以テ余ハ議論ノ冗長ニ涉ル  
 チ憚リ此ニ之レヲ贅セス谷本氏が後文ニ於テ引證セル碩  
 學スペンサー氏其ノ人ノ如キハ平素右ノ基礎上ニ社會學  
 ヲ建築スルノ持論ヲ主張シテ止マサルノ一大哲學者ナラ  
 ズヤ谷本氏ニシテ其詳説ヲ知ラント欲セバスペンサー氏  
 ノ漫筆文ヨリモ寧ロ該大哲學者畢生ノ熱血ヲ注ゲル傑作  
 湊合哲學ノ本集ニ就キテ之ヲ見ヨ（少シク當ラザルカモ  
 知レザレモ谷本氏が下文ニ引證セルスペンサー氏ノ説ノ  
 如キハ氏ノ漫筆文タル社會平權論（ソシアル、スタヂック）  
 或ハ世理略論（スタデー、ヲフ、ソシヨロヂ）ノ類中ヨリ  
 抜抄セシナラント思ハル）若シ谷本氏ニシテ本集ニ通曉  
 スルノ活眼ヲ有スルナラバ本集ノ全体ヲ貫通シ至ル所右  
 ノ精神ニシテ其紙面ニ汪洋乎タルヲ見ン



○ 老子ヲ駁ス(前々號ノ續) 寺山敬之助

子ノ道義ヲ以テ子々トスルハ心意又事共ナリ夫レ事物悉  
 皆ノ名稱ハ固然ナルモノニアラスソノ初ハ必ス無名タル  
 ヘキナリ殊ニ稱呼スルニ便ナランカタメ之ニ名クルノミ  
 猶太陽ノ出ルヲ視テ晝ト呼ヒ天ノ暗黒ナル若クハ月星ノ  
 出ルヲ認メテ夜トイフカコトシ名稱ノ起原コノ點ニ外ナ  
 ラス即チ仁義道德等生民行爲上ノ名稱モ亦ソノ一部分タ  
 ラサルヘカラス若シ名稱アリテ初メテ萬物アリトイヘル  
 謬見者アラソカ余ハソノ人ニ向ツテ問ハントス航海中颶  
 風ニ遇フテ無人島ニ漂着セラル、モノアリ當時ソノ島内  
 ニ仰テ天ナク俯シテ地ナク日月星辰ナク山河艸木ナク禽  
 獸ナク虫魚ナキカト無人島ノコトナレハ人コソナケレ土  
 一塊水一滴モナシトイフヘケンヤ喩ヘハ仁義ノ名稱ナキ  
 以前已ニ人類ノ行爲上ニオイテ仁義ト稱スヘキモノアリ  
 道德ノ名目ナキ以前已ニ人類ノ思想上ニオイテ道德ト呼  
 フヘキモノアリシハ疑フヘカラサルナリ子亦無名ハ有名  
 ノ本タルヲ知レルカコトシ故ニ名可名非常名トイヘ又無

名天地之始トイヘリ而シテ仁義道德ヲ以テコノ範圍内ニ  
 アラサルカコトク思推スルハ何ソヤ意ノ解スヘカラサル  
 モノナリ儲テ人類ハ他ノ動物ト異ニシテ上古ト今世トニ  
 論ナク反省力ト榮利心ト關セス共居交接スルヲ樂ミ獨坐  
 寂然タルヲ悲マサルモノアラサルナリ果シテ然ラハ亦仁  
 義道德アリトイフヘキノミ如何トナレハ相互ニ愛シ相互  
 ニ戕ハサルノ情ナクンハ一日モ共居交接スルヲエサレハ  
 ナリ余ノ故ラニ儒教派ノ語ヲ引テ左ニ証スル所以ノモノ  
 ハ儒教派ノ論ニ異議ナキニアラサレトモ子ノ反對視スル  
 者ハ儒教派ナルヲ以テノミ孟子曰ク惻隱之心仁之端也羞  
 惡之心義之端也ト又韓子仁義道德ヲ解シテ曰ク博愛之謂  
 仁行而宜之之謂義由是之焉之謂道足乎已無待乎外之謂德  
 ト或曰ク天下之事物出于偶然而然者之謂道ト或曰ク仁者  
 愛之至也ト名稱ナキ以前人民ノ行爲上此ノ如キ顯象ナシ  
 トイフヘカラス且ツ仁義道德ノ起ル偶然ニアラス必スソ  
 ノ源由ナクンハアラス西人ノ説ニ曰ク天道ハ人類ヲ苦樂  
 ノ管内ニ放置セリト即チ人類ハ生シヨリ死ニイタルマテ  
 苦樂ヲ離レテ生活スルアマハスト謂ノ意ナリ而シテ苦ヲ

避ケ樂ヲ得ントスルノ情ハ獨リ人類ノミナラス也ノ有幾

テ火ヲ見レカコトシ



ノ本タルヲ知レルカコトシ故ニ名可名非常名トイヘ又無

苦樂ヲ離レテ生活スルアタハスト謂ノ意ナリ而シテ苦ヲ

避ケ樂ヲ得ントスルノ情ハ獨リ人類ノミナラス他ノ有機物ニ於テ亦切ナリトス故ニ喜怒トイヒ快樂トイヒ思想トイヒ決斷トイフ吾人心理上凡百ノ顯象ハミナ苦ヲ避ケ樂ヲ得ントスルニ外ナラス故ニ一タヒ快樂ヲ得ト感スルハ百方之ヲ回想シ永久之ヲ保ンコヲ欲セリ此ノ如クシテ子々孫々遺傳シテ一種ノ理想ヲ鑄成シ終ニ人類固有ノ天性ト想像スルニイタル即チ仁義道德等ハ己ヲ愛スルノ情即チ快樂ヲエント欲スルノ情ヨリ成立スル者ニ一箇人ノ社會ニ處スル方法トイハサルヲ得ス果シテ然ラハ太古名稱ナキ以前生民ノ行爲上ニ仁義道德アリト斷定スルモ不可ナキナリ唯主義トナシテ説キシモノナカリシマテナリ抑モ春秋戰國ノ世タル周末衰弊ノ中ニ起リ人情ミナ浮華ニ流レ天下四分五裂シテ互ニ侵暴爭鬪ヲ事トセリ孔丘ツノ間ニ出テ生民ヲ塗炭ニ濟ハント欲シテ仁義道德ノ教ヲ立リ乃チ春秋戰國ノ亂世アリテ而シテ仁義道德ノ教初メテ明ナルヲ知ル是ニ由テ之ヲ見レハ人類ノ邪欲ニ陷ルヲ以テ仁義道德ノ結果ナリトスルノ謬見ト仁義道德ヲ滅却スレハ爭鬪侵暴ヲ止ムヘシトスルノ誤解ナルハ照々トシ

テ火ヲ見ルカコトシ吾人行クトコロトシテ物体ノ吾カ視覺ヲ遮ラサルコトナシ而シテ此等物体ハ往古一ノ變遷ヲ起シテヨリ爾后一原因ハ一結果ヲ生シ一結果又或ル一原因トナリ常ニ無限無極ノ進化ヲナシテ遂ニ吾人ヲシテツノ由テ起ルトコロノ本源ヲ探究スルニ苦マシム是レ萬物ノ常則ニシテ萬物ハコノ常則ヲ守ラサルモノナシト斷言スルモ決シテ不可ナキモノナリ然ルニ一論者アリ獨リ人性ハコノ常則ヲ守ルモノニアラストイヘ若クハツノ進化ヲ防遏スルヲ得ヘシト云フ者アランニ誰カツノ愚ヲ笑ハサランヤ人性ノ變遷ヲ証スルニ高尙ナル理論ヲ要セス各國史乘ヲ以テ足レリトス余ハ更ニ支那ニツイテ証セントス三五ノ生民ハ土壤相讓リ居處相避ケシモ戰國ノ人民ハ侵掠戰鬪ヲ事トセシニアラスヤ又老子自身ノ如ク無爲不言ノ教ヲ立テシニモ抱ハラス孔孟等ノ如ク道義主義ヲ主張セシニアラスヤ又該國ハ道義ノ盛ナルニモ抱ハラス或ル種族ハ生兒ヲ溺死セシムルノ慣習行ハル、ニアラスヤ又古ハ周ノ粟ヲ食フヲ耻チテ首陽山ニ餓死セシ夷齊ヲ以テ無二ノ忠士トセシ



モ今ハ頑固視シテ笑フニアラスヤ又古ハ復讎ヲ以テ榮譽  
 トセシモ今ハ法律ノ問トコロトナルニアラスヤ老子ノ道  
 義理想ヲ滅絶シ得ルト思惟スルモノハ徒ニ皮想ノ見解ニ  
 シテ萬物ノ常則ヲ知ラサルニヨル好シヤ子ノ注交通リ滅  
 絶シ得ルモ便宜上ヨリ觀察ヲ下セハ決シテ得策ト云ヘカ  
 ラスヒューム氏曰ク人間ノ幸福ヲ害スルノ行爲ハ道義ノ  
 誹譏ニ當ルモノナリトベンサム氏又曰ク所謂幸福トハ快  
 樂若クハ快樂ノ起ル根底ヲ指スナリ而シテ世人ノ道義ヲ  
 以テ善シトスルハ快樂ノ之ヨリ出ルカタメナリト是ニ由  
 リテ之ヲ見レハ道義ト快樂トハ并行スルモノニ道義ア  
 レハ即快樂アリ道義ナケレハ快樂亦無キナリ希臘ノアン  
 チステニス氏ノ如ク漫ニ快樂ヲ疾視シテ快樂ハ即チ罪  
 惡ナリト思惟スルハ其意ノ何モノタルヲ探究セサルノ巨  
 謬ナリ固ヨリ他人ヲ害スルノ快樂ハナスヘカラスト雖ト  
 モ一切他ノ快樂ヲ罪視セハ人類ハ何ヲ以テ生活セント欲  
 スルヤ餘ハ更ニ道義ト快樂ト并行スルノ理ヲ略論セン夫  
 レ人心ニ存在スル欲情ニ他欲ノ基トナルモノト其ノコレ  
 ヨリ生出スルモノト約言スレハ天稟ノ情ト識得ノ欲トノ

二者アリ而シテ吾人萬般ノ情欲ヲ分析スル極テ精極テ密  
 ナレハ遂ニ純一無雜ナル防苦望樂忌厭好愛ノ四情ヲ發見  
 スヘシ是レ天稟ノ情ナリ而シテ道義ハ實ニ源ヲユ、ニ生  
 セリ情欲ノ社會ノ進化ニシタカヒ物ニ感シ類ニ觸レ驗認  
 スルトコロアルニヨリテ起ルモノヲ識得ノ欲トイフ即チ  
 天性ノ欲ニ附屬スルモノニシテ蓋シ天性ノ情ヲ達セシム  
 ルノ道路ナリ故ニ天稟ノ情ニ於テ晦暝ナルモノヲ顯著ナ  
 ラシムヘク又天稟ノ情ニ於テ未タ發達セサルモノニ開發  
 ノ機會ヲ與ヘシムヘシ道義ハ實ニユノ情ニヨリテ一箇ノ  
 理想トナルナリカク論シ來レハ道義ハ自然ノ道ニシテ到  
 底人力ノ防止スヘキニアラサルヲ知ラン太古生民ノ状態  
 ヲ察スルニ人類尙ホ少ク世事尙ホ簡單ナルヲ以テ僅カニ  
 天稟ノ情ノミニシテ道義ハナホ晦暝ニ屬スト雖トモ度學  
 連數ノ理ニヨリテ一旦人類繁殖シ世事煩雜ニ移リ人性ノ  
 物ニ感シ類ニ觸レテ識得ノ欲初メテ發達スルニアタリ猶  
 ホ太古ノ状態ヲ顯出セントセハ勞シテ功ナキノミナラス  
 社會何ヲ以テ立ツコトヲ得ンヤ人類何ニ之イテ幸福ヲ享  
 ルコトヲ得ンヤ世上ニ父子相容レス兄弟相闘ノ慘狀ヲ呈

出セントス此ノ如クシテ便宜ヲウルト云ヘキカ

シテコノ三能力ハミナ官能ノ作用ニヨリテツノ職分ヲ盡



ヨリ生出スルモノト約言スレハ天稟ノ情ト識得ノ欲トノ

ルコトヲ得ンヤ世上ニ父子相容レス兄弟相闘ノ慘狀ヲ呈

出セントス此ノ如クシテ便宜チウルト云ヘキカ

老子ノ道義ヲ排スル其源因ナクンハアラス之ヲソノ書ニ

考フルニ天下皆知美之爲美斯惡已皆知善之爲善斯不善已

トイヒ五色令人目盲五味令人口爽五音代人耳聾馳聘田獵

令人心發狂難得之貨令人行妨トイヒ不尙賢使民不爭不貴

難得之貨使民不爲盜不見可欲使心不亂トイヒ見素抱樸少

私寡欲トイヘリ是ニヨリテ余ハ子ノ純然タル禁欲主義ヲ

奉シテ以テ道義ヲ排スルノ材料トスルヲ知レリ故ニ余ハ

茲ニ禁欲主義ノ誤謬ヲ駁撃スルヲ以テ順序トナスト雖ト

モ文頗ル煩雜ニワタルヲ恐レ聊カソノ一斑ヲ論シテ満足

スヘシ夫レ人類タルモノミナ官能ヲ備サルハナシ而シテ

コノ官能ハ五箇ノ作用ニヨリテ之ヲ心裡ニ通シ而シテ萬

般ノ顯象ヲ生出スルモノナリ精ク言ヘハ官能ノ外物ニ接

近スルニアタリ甘苦香臭彩色寒暖方圓廣狹ヲ辨知シ感動

力ノ作用ニヨリテ奮勵激怒恐懼憂戚悔惜好愛苦痛決樂等

ノ顯象ヲ生シ次テ決斷作爲及ヒ觀念審辨記憶推論概念等

智意ノ顯象ヲ生ス按スルニ情智意ノ三能力ハ相連接并屬

シテ其ノ用ヲナスモノナリ決シテ分離スヘキニアラス而

シテコノ三能力ハミナ官能ノ作用ニヨリテソノ職分チ盡

スモノナレハ實ニ官能ハ吾人ノ最要具ニシテ吾人ノ幸福

ハコノ官能ノ作用ニヨリテ得ルナリスヘンサレ氏曰ク官

能ヲ作用スルハ人類ノ義務ナリト意フニ社會ノ文化ハ社

會ヲ組織スル一箇人ノ官能ヨリ成ル吾人ハ官能ノ美ノ美

タルヲ識別シ善ノ善タルヲ知得スレハコソ仁義道德美術

工業起ルナレ若シ官能ニシテソノ用ヲナサ、レハ人類ハ

何チ以テ靈物タルノ價值ヲ有スヘケンヤ未タ價值ヲ有ス

ルト否トヲ問ハス善モ不善モ美モ不美モ悉皆同一ノ感動

ニ出テシメントスルハ到底出來ヘカラサルコトナリ余暫

ラク子ニ問ハン瓦斯燈ノ光リト行燈ノ明リトハ孰レカ便

利ツヤ美服ヲ着クルト敝衣ヲ被ムルトハ孰レカ樂キヤ九

尺二間ノ裏店ニ住ムト巍然タル大厦高樓ニ眠ムルトハ如

何犯罪者ト施善者トハ如何壓制政府ト自由政府トハ如何

子ハ尙ホ同一ノ感動ニ出テシメント欲スルヤ子亦隨分奇

人トイハサルヲエス抑モ子ハ支那哲學士中尤モ幽遠深邃

チ以テ稱セラル、モノナリ然レモ以上論スルトコロニヨ

リテ容易ニ子カ論理ノ不可ナルヲ知ルヘシ其他子ノ説ニ



於テ駁スヘキモノ多シト雖トモソハ他日再ヒ論セントス

理醫學講談會演說筆記

○ 炭素の變化(前號の續き)

櫻井錠二君

さて鉄、燐、等の空氣中に於て錆るとき其の吸收する瓦斯を鉄或は燐の錆より取り戻す事の出来るやと問ふに之の出来るとなれども六か敷故之に類したものを取て試験すれば其事容易と譯ります即ち水銀を空氣中に於て熱すれば漸々變化して遂に全く赤色の錆と成ります今この水銀錆に一層烈き熱を加ふれば忽ち分解して二種のものに成ります其一は即ち元の水銀にて此のガラス管の上の方に溜り他れものは一種の瓦斯体にて此管を通りて片方の器に集ります今この瓦斯の性質は如何と尋るに以前管の中に残りしものとは全く反對して斯の如く火を消さぬ而已ならず物に燃るをよく助け又一度消やしたるものも亦も此様に再び燃へます遠方にてハ視へぬかも知れぬ故も一一度繰り返して試験しよふ(再び燃して看せる)今試にこの瓦斯一合と最前管の中に残りし瓦斯四合との

割合にて混れば丁度通常の空氣と同じきものが出来ます之より考ふれば空氣は物の燃るを助ける瓦斯一合と熱火を消す瓦斯四合との割合を以て出来たる混せものなるを略々御譯りて有りませよふ、化學者は第一の瓦斯を酸素と呼び第二の瓦斯を窒素と呼びます

扱酸素は物の燃るを助ける性質なる事と今一層確實ならしめん爲に二三の試験を御目よかけしよふ(一)木炭の一片に火を點し酸素の壇中へ入るれば此の如く奇麗に燃へます(二)鉄の如く通例燃へないと思ふものにて之を少しく熱して酸素の壇中へ入るれば此様に容易に且つ立派に燃へます(三)次に硫黄を以て試験するお同じく奇麗に燃へ又(四)燐の如きを實に甚しき光を放つて燃へますさて(一)の試験の如く酸素の中よ木炭の燃るとき如何なる物体の生するやと問ふに今試に其壇の中へ石灰水を入れて振れば此の如く白き沈澱を生じます是れハ皆様の既に知るらと通り炭酸瓦斯の在る故であります薪、木炭、石炭、油、蠟燭等は主に炭素と水素の二物より成り立ちます而してその燃ゆるとき炭素は最後の試験に依

て明かなるが如く炭酸瓦斯と成り水素ハ水蒸氣となりま

の如く黒き煙を生じます又こゝに沼氣或は沼瓦斯と謂る

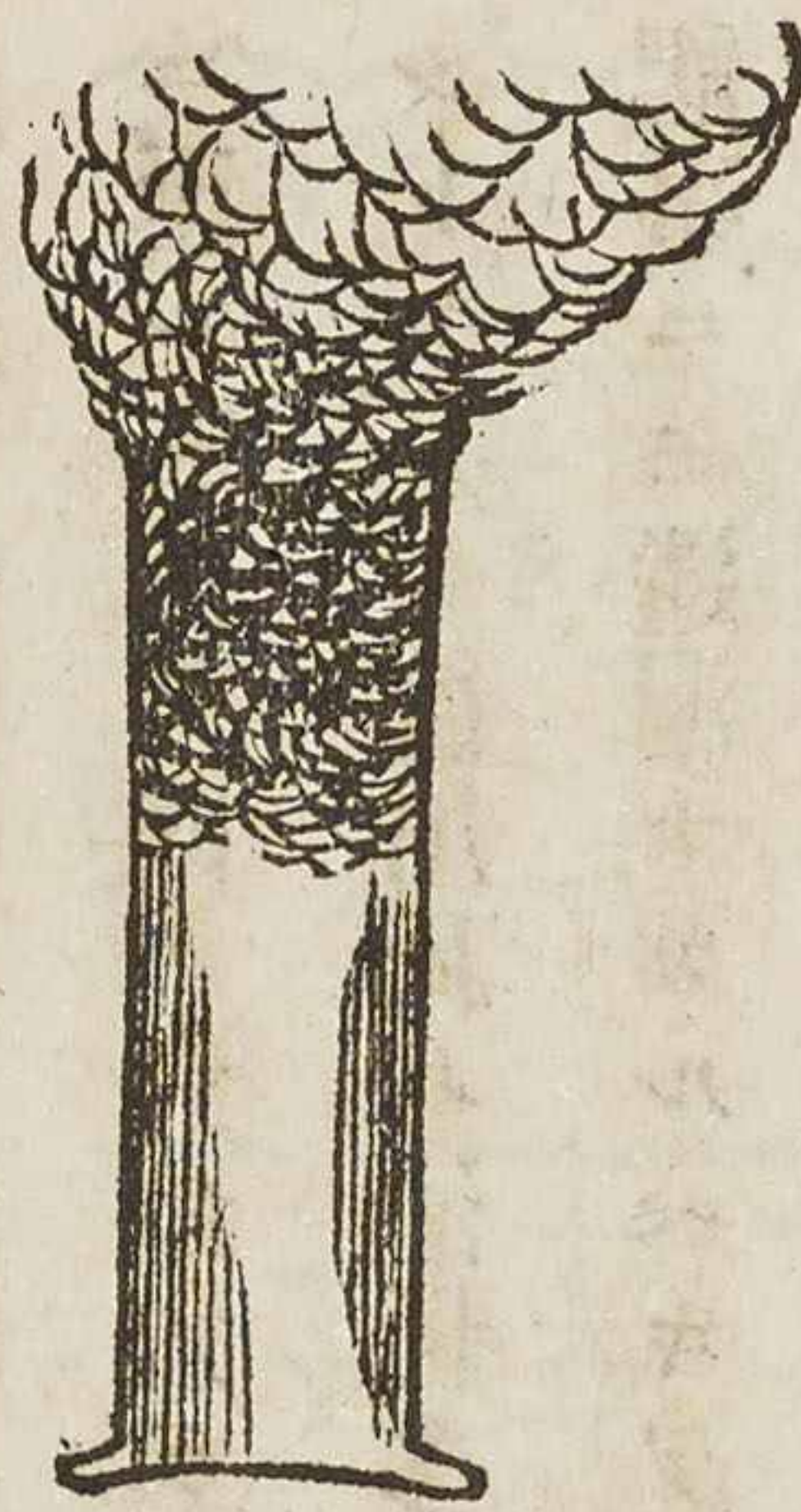


今試にこの瓦斯一合と最前管の中に残りし瓦斯四合との

り立ちます而してその燃ゆるとき炭素は最後の試験に依

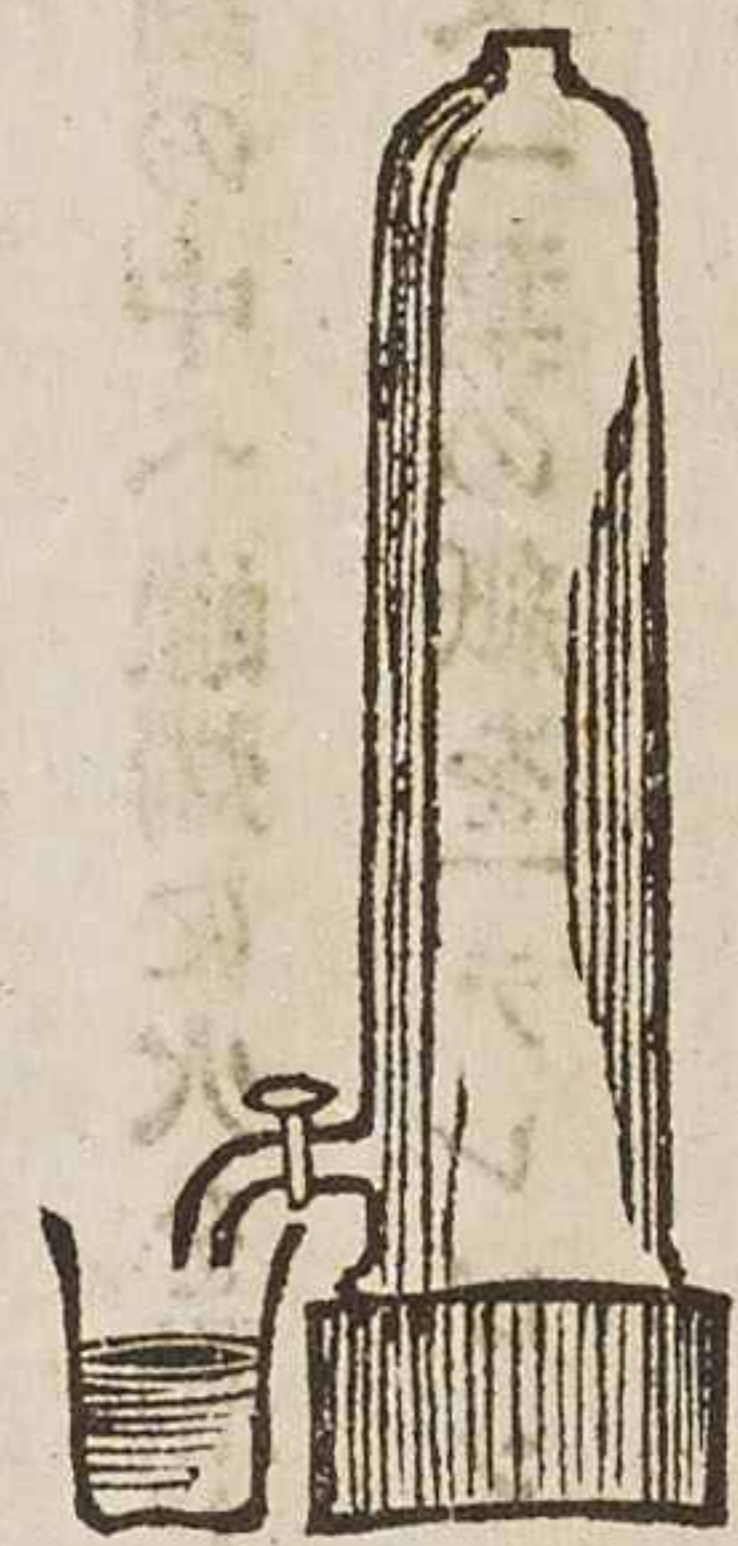
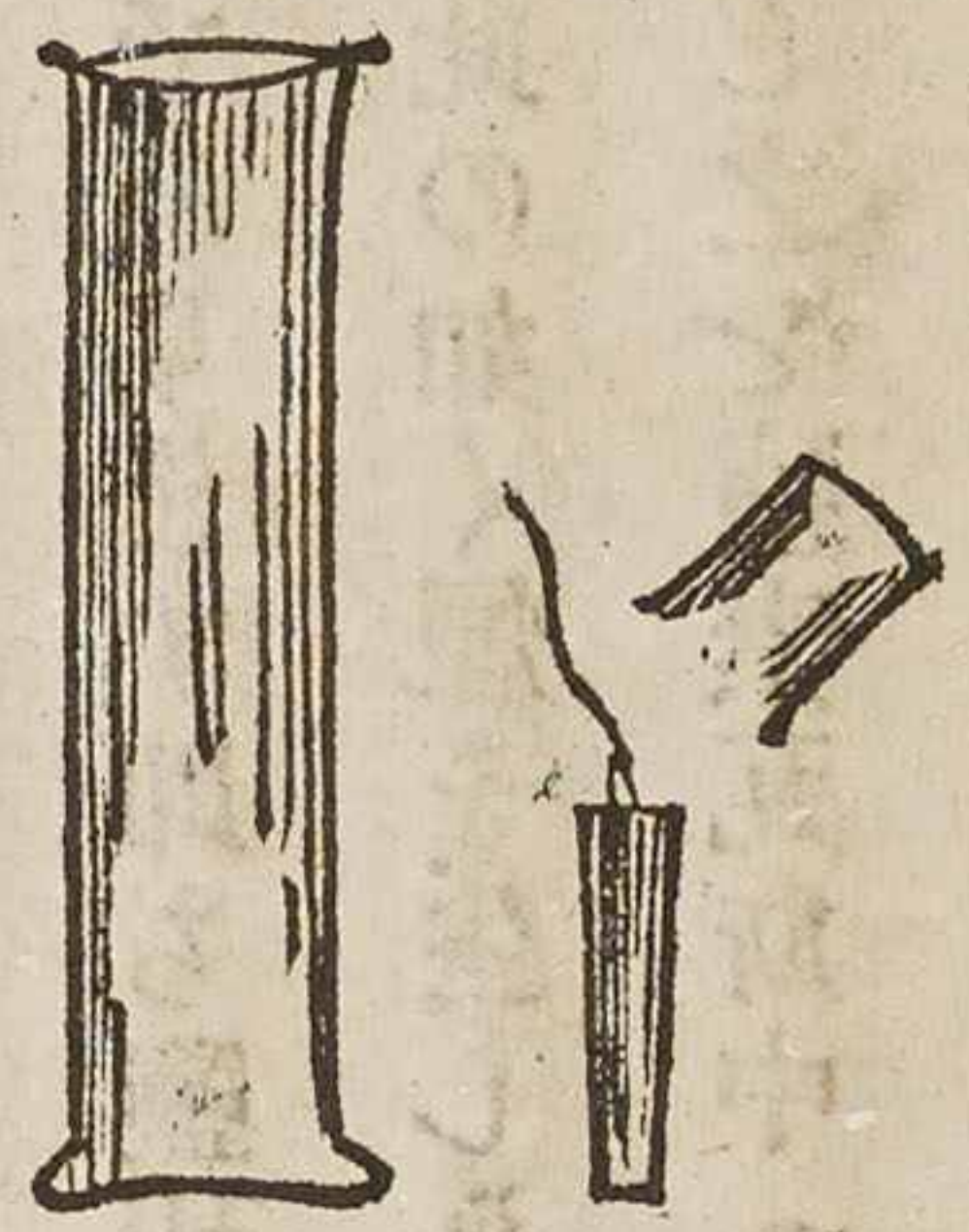
て明かなるが如く炭酸瓦斯と成り水素ハ水蒸氣となりま  
 す去り乍ら若し空氣の流通悪しくして十分に燃へないど  
 きは水素のみ善く燃へて炭素は多く遊離されます今「ラ  
 ムプ」と以てお話すれば「ラムプ」には諸君御承知れ通り  
 「ホヤ」の下に小さな穴が澤山あり其所から空氣が通りて  
 油の燃ゆるのを助けます今試にこの穴を閉げを空氣の流  
 通が悪くなり油が十分に燃へませんから此の如く黒き煙  
 が出ます此の黒き煙を即ち炭素の細き分子であります我  
 邦に於て炭を焚くのも之と同じき道理にて空氣の流通を  
 悪くして薪を焚けば即ち木炭が出来ます又天然に石炭の  
 出来るものも矢張此理に由ります  
 化學者の所謂六十五元素の中に鹽素と云へるものあり食  
 鹽より得るを以て斯くは名けますこの鹽素と水素とはよ  
 く化合すれども炭素とは直に化合しません故ふ其中で油  
 等を燃せば空氣の流通悪き所にて燃へたと略々同じき  
 とであります即ち鹽素瓦斯の中へ蠟燭に火を點して入れ  
 は此の如く煙を生じます又一葉の紙を「テレピン」油にて  
 浸し之を鹽素瓦斯中へ投れを自然に火を發して燃へ亦此

の如く黒き煙を生じます又こゝに沼氣或は沼瓦斯と謂る  
 一種の瓦斯ありこれは夏の頃泥溝、沼等より涌き出るも  
 のにて水素と炭素を含み油、蠟燭、等に類したもれであり  
 ます之を空氣中に於て燃せし炭素水素共に十分に燃へて  
 光の弱き焰を發します其時炭  
 酸瓦斯の出来ることは石灰水  
 にて斯く明白に譯ります併し  
 今沼氣を鹽素と混ぜて之を燃  
 せを御覽の通り黒煙雲の如く生じます是れ即ち沼氣の  
 水素が鹽素と化合して炭素を遊離したる譯であります  
 炭酸瓦斯の前ふも度々説きたる如く點火を消し又石灰水  
 と化合して白き沈澱と成るなり其外にモ一つ要用ある  
 性質ハ其の重さの事であります炭酸瓦斯は空氣より重き  
 と殆んど一倍半なりこれを証するには様々の試験があり  
 ます(一)こゝに炭酸瓦斯を入れたる一の「シリンドル」あ  
 り今其中より器を以て水を汲む様に炭酸瓦斯を汲み出し  
 て蠟燭の火にかければ斯様に消へます(二)又此に下の方  
 に口のある一の「シリンドル」あり其中へ炭酸瓦斯を入れ



今沼氣を鹽素と混ぜて之を燃  
 せを御覽の通り黒煙雲の如く生じます是れ即ち沼氣の





て下  
の口  
を開  
けば

丁度樽より酒の流るゝ如く炭酸が流れ出て受器中れ石灰  
水を濁らすと御覽の通りであります (以下次號)

地震談

關谷 清景

地震ハ天災地變ノ中ニ就テ最モ怖ルベキモノナリ一朝ニ  
シテ數萬ノ生靈ヲ戕ヒ一夕ニシテ多年蓄積ノ財寶ヲ烏有  
ニ歸セシムルカ如キ其記我邦ノ歴史中ニ明徴スベシ願フ  
ニ聽衆中ニモ彼ノ安政年度ノ大震ニ於テ自ラ其艱難慘狀  
ヲ經驗セシ人モ多カラシ左レハ我邦ノ如キ土地ニ住居ス  
ル者ハ充分之ヲ研究シ又ハ之ヲ研究スル者ヲ助ケ或ハ己  
レ自ラ之ヲ研究セサルモ其大体ヲ知り置クコト大切ナルベ  
シ余ハ先ツ本邦ニハ昔ヨリ今ニ至ルマテ地震ノ多キコトヲ  
示サントス

過ル三百年間大地震ノ數 往古大地震ノ數ハ之ヲ歴史

地震年代記等ノ書ニ就テ見ルヲ得ベシ服部一三君ハ其  
著書中ニ過ル千五百年間ニ歴史ニ確証アル田畑家屋ヲ破  
壞シ人畜ヲ毀損セシ地震ハ少クトモ百五十回アリシヲ記  
セリ即チ全國ニ大地震ハ十年間ニ一回アルノ割合ナリ然  
ルニ他ノ學士ハ之ニ倍スル大地震アリシヲ説リ斯ノ如ク  
其差異アルハ單ニ歴史ヲ閱シテ其大小ノ區別チナスハ難  
キカ故ナリ若シ家屋人畜毀損ノ如何ヲ以テ判斷セハ都會  
ノ地震ハ小ナルモ其災禍ハ國內無人ノ境ニ起リタル大地  
震ヨリモ歴史家ハ大業ニ記スルナラン且ツヤ往古ハ歴史  
ノ記事密ナラズ況ンヤ戰國ノ時ニ於テ之ヲ願ルニ違アラ  
ス其疎漏ナルヤ知ルベシ故ニ余ハ徳川氏起業前ヨリ今日  
ニ至ル三百年間ノ大地震ヲ擧ケテ地災ノ多少如何ヲ示サ  
ントス是レ徳川氏ハ治世多ク又歴史モ綿密ナレハ地變ノ  
記事ニモ遺漏ナカルベキヲ信スレハナリ今日ヨリ三百年  
前天正十三年ハ秀吉治國ノ時ニシテ(西曆千五百八十五年)  
是レヨリ貞享元年(千六百八十四年)ニ至ル百年間ニハ十  
七ノ大地震アリ此間ノ大震地ハ慶長元年(千五百九十六  
年)伏見城破壊シ京都大佛顛倒ノ如キハ頗ル人口ニ膾炙

セリ是ヨリ天明四年(千七百八十四年)ノ百年間ニハ十五

々ハ明日一ノ大地震アルモ不足ヲ云ヒ立ツルヲ能ハサル



セリ是ヨリ天明四年(千七百八十四年)ノ百年間ニハ十五  
回ノ大地震アリテ其内文祿十六年(千七百三年)寶永四年

ノ地變モ亦世人ノ知ル處ナリ又是時ヨリ今年ニ至ル百年

間ニハ二十回ノ大地震アリ此間ニハ彼ノ弘化四年(一千

八百四十七年)信州善光寺ノ大地震安政元年駿河、三河、

遠江、伊賀、伊勢、五畿内、四國ニ蔓延セル震災ノ如キ同安

政二年江戸大震ノ如キ其損害慘狀聽衆中目撃セシ人アル

ベシ此等異變ノ及ボセル災害ノ大小如何ハ今精密ナル統

計ヲ得難シト雖モ安政ノ大震ニハ江戸ノミニテ潰家壹萬

四千貳百四十一、潰土藏千六百九十、人命ヲ失フコト十萬餘

ナリト或ハ之ニ倍スルノ數アリト云ヘリ又燒失家屋モ蓋

シ萬ヲ以テ數フルナラン以上三百年間ノ大地震總數ハ五

十二ニシテ其平均五年九ヶ月ニ一回ノ割合ナリ是皆山岳

ヲ崩シ民家ヲ破損シ人畜隕命ノ災害アリシモノトス又過

ル二百年間江戸ノミニテ十一回ノ大地震アリ即チ當府下

ニハ平均十八年毎ニ一回ノ大地震アリト覺悟スベシ然ル

ニ江戸ニハ安政二年以來滿二十八年ヲ經過シタレハ既ニ

地震ノ有ルベキ時期ナルニ今日マテ之レ無キハ幸ナリ我

々ハ明日一ノ大地震アルモ不足ヲ云ヒ立ツルコト能ハサル  
ナリ

過ル三百年間全國大地震數

天正十三年	十七
千五百八十五年	十七
貞享二年	十七
千六百八十五年	十七
天明五年	十五
千七百八十五年	十五
明治十七年	二十
千八百八十四年	二十

平均五年九ヶ月ニ一回

過ル二百年間江戸ニハ十一回ノ大地震アリ即チ十八年毎

ニ一災ノ割合ナリ

東京府下近年地震ノ數 地震ノ數ヲ知ルニハ地震計ヲ

備ヘ置クコト肝要ナリ本邦ニテ從來地震計ノ設ケアリシハ

當府下ノミニ今左ニ地理局測量課報告ニヨリ明治八年九月

ヨリ本年八月ニ終ル滿九ヶ年間ノ地震表ヲ見ルニ右九年

間ノ地震總數ハ五百七回ナリ之ヲ四季ニ大別セハ春百五

十七夏九十七秋九十四冬百五十九トス更ニ四月ヨリ九月

迄ヲ暑候トシ十月ヨリ三月マテヲ寒候トシ此二候ニ分配

スレハ暑候ニ二百三寒候ニ三百四ナリ即チ寒候ノ震數ハ

暑候ヨリ一倍六分ノ多キヲ見ルベシ其滿九ヶ年間ノ總數ハ



五百七ナレハ毎年平均震數ハ五五、二ナリ即チ六日十四時間毎ニ一震ノ割合ナリ但シ東京ノ地タル箱根、富士、淺間、伊豆、大島、上野等ノ諸火山地方ニ遠カラサルヲ以テ之ヲ他ノ國々ニ比較スレハ震災ノ多キヲ論ヲ待タズ然レモ内國一般ニ器械ヲ裝置シ之ガ觀測ニ從事セハ其總數ハ更ニ尙ホ幾倍ナルヤ知ルベカラズ

北海道ハ火山及ヒ地震ノ多キ地ナルカ昨明治十六年一月ヨリ去月迄ノ十八ヶ月間ニ根室並ニ札幌等ヨリ日本地震學會ヘ報告セシ地震ノミニテモ已ニ六十回ナリ若シ夫レ北海道ニテモ東京ノ如ク精密ノ器械ヲ置カハ東京地方ニ讓ラザルノ數アラン已ニ東京地方并ニ北海道兩所ノ震數ヲ合算スルニ猶且ツ三日毎ニ一回ノ地震アリ然ラハ之ニ中國九洲四國ノ地震ヲ加フレハ日本全國一日ニ少クモ一回或ハ一回以上ノ地震アルヘキノ理ナリ斯ノ如ク地震ノ多キ地ハ地球上蓋シ亦多カラサルベシ

地震トハ何ソ其性質 地震ノ性質ヲ知ラント欲セハ須ク先ツ地ノ性質ヲ知ルベシ第一地ハ幾分ノ彈性ヲ有スルヲ了知スベシ今若シ劇シク之ヲ擊テハ恰モ鋸ノ如キ薄

キ鐵片ヲ打ツト等シク暫時ノ間ハ自ラ震動スベシ然レモ漸チ以テ其勢ヲ減スルナリ第二ニハ地ハ震動ヲ此地ヨリ彼地ニ傳播スルノ性アリ故ニ時トノ奧州仙臺ニテ起リタル地震ヲ東京ニテ感スルコアルハ是レ地ハ震動ヲ傳送スルコト恰モ空氣中音響ヲ傳播スルカ如シ今此室中ニ於テ予ノ發シタル音聲ハ前後左右上下八方ニ聞ユ即チ予カ口ヲ中心トシテ音波ノ球狀ヲ爲シテ進行スル所以ナリ地震モ亦音響ト同シク若シ地中ニ火山暴發地層ノ潰裂陷入ノ如キ變アツテ其一部烈シク震蕩セハ其震動ハ前後左右上下ニ傳播シ遞次遠方ニ達スルノ様ハ恰モ音波ノ空中ニ於ケルカ如シ故ニ地動ノ傳播スル様ヲ震波ト名ク(震波ニ法線波及ヒ橫斷波ノ別アリ)又震波ハ音波ノ如ク其震點ヲ中心トシ球狀ヲシテ四方ヘ散布スルナリ却說地中ニテ發シタル劇動ハ唯一回ナルモ地ハ彈性アルカ故ニ前ニ例セル薄キ鐵片ヲ打ツト等シク暫時ノ間ハ前後左右又ハ上下ニ震蕩スル者ニシテ吾人ノ通例地震トシテ感スルモノハ即チ此地分子ノ震蕩ナリ而テ其勢力ハ漸チ以テ減シ終ニ消滅スルニ至テ止ム

地震ノ原點遠隔ノ地ニアル時ハ吾人ノ居ル所ノ地分子ハ

ニ過ギズ又常ニ感スル小震ノ如キハ地ノ動クコト實ニ微小



了知スベシ今若シ劇シク之ヲ擊テハ恰モ鋸ノ如キ薄

消滅スルニ至テ止ム

地震ノ原點遠隔ノ地ニアル時ハ吾人ノ居ル所ノ地分子ハ前後ニ移動シ又震源深ク地中ニ在リテ吾人ノ足下ヨリ發スル時ハ震動ハ上下ナリ是地震ニ橫動并ニ豎動ノ二種アル所以ナリスノ如ク地震動ノ性質ヲ講究スルニハ震波傳播ノ速度ト地分子往復移動ノ兩者ヲ區別シテ論ゼザルベカラス

震波ノ速度ハ頗ル迅速ニシテ殆ント砲丸速度ノ半ナリ然レモ土質ノ堅柔如何ニ由テ一樣ナラズ柔質ノ土地ニ於テハ一秒時ニ八百尺ニシテ堅質ノ土地ニ在テハ千六百尺ニ達スト云ヘリ今橫濱及東京ノ間ハ柔質ノ土地ナリト假定シ此比例ニテ傳播スルハ兩所ノ距離十五英里ヲ一分時半ヲ以テ經過スベク又東京ヨリ京都ノ間ヲ百里トシ平均ノ速度一千二百尺トスルハ京都ニテ發シタル地震ハ十八分時ノ後東京ニ達スベキナリ

又地分子ノ左右又ハ上下へ震動スルノ模様ヲ器械ヲ以テ綿密ニ測ルニ地ノ震動スルノ數ハ一秒時間ニ一回若シクハ二回位ナリ其移轉スルノ距離ハ誠ニ僅少ナリ近年東京ニテ吾人ノ嘗テ感セル頗ル強キ地震ニシテ人々喫驚騷擾シテ戶外ニ奔出セシ時ト雖モ地ノ動クハ僅カニ二三分

ニ過ギズ又常ニ感スル小震ノ如キハ地ノ動クハ實ニ微少ニシテ一二厘又ハ三四厘ノ多クシテ之ヲ譬ヘハ爪ノ厚サニ過キズ而シテ又地震繼續ノ時間即チ地震ノ長サハ通例一分ヨリ三四分ノ間ニアリ七八分ニ達スルハ極メテ少ナクシテ半分ヨリ短カキモ亦甚タ稀ナリ

地震ハ必スシモ常ニ一劇動ノ爲ニ發スルモノニアラス往々地中ニ陸續動搖連發スルコトアリ斯ルハ吾人ノ地震ヲ感スルノ時間ハ甚タ長キコトヲ知ルベシ又某地震ノ爲ニ地中動搖シ他ノ地震ノ原因トナルコトアリ是レ地震ノ一時ニ諸國ニ連互蔓延シタル事跡ヲ歴史上ニ見ル所以ナリ又地分子震動ノ模様ハ甚タ錯雜ナル者ニシテ仮令ハ甲地ニ劇動アレハ之ヲ乙丙丁ノ各地ニ感スルトセンニ乙地ハ震源ナル甲ヨリ直接ニ震動ヲ傳播シ來リテ之ヲ感セシノミナラス又地質ノ構造ニヨリ震波ハ丙丁ノ地質中ニ屈折反射セラレテ更ニ乙地ニ達スルコトアリ但シ此震波ハ甲ヨリ直接ニ進行セシ者ヨリ少ク後レテ達スルナリ故ニ甲地中ノ劇動ハ一ヶ所ニシテ一回ナルモ乙地ニハ之ヲ感スルコト稍久シ斯ル時ニハ地分子ノ震蕩ヲ受クルハ長ク地震ハ數



分時間連續スルナリ

又地震ハ地層ノ崩壞陷入等ヨリ生スル激動ノ爲メニ起ル者トセハ吾人ハ地震ノ初發ニ當テ最モ強キ動搖ヲ感スヘキニ其然ラズシテ往々初メニ緩慢ニシテ漸次ニ其勢ヲ増ス者アルハ奈何ト云フノ疑問アリ是至極尤ナル間ニシテ之ニ答ヘンニハ第一某地層崩壞セントスルヤ先ツ某一小部ノ破損ヨリ漸ク大ニ及ホスハ猶ホ大風ノ家屋ヲ倒スニ當テ先ツ柱壁ノ小軋ヲ聞キ然ル後拉然顛倒スルカ如シ第二ニハ細微ノ急速ナル震波ハ動搖ノ大ナル震波ヨリ傳播ノ速度迅カナルカ故ニ小震動ハ大震動ニ先ツテ彼地ヨリ此地ニ達スルニヨル

(未完)

雜報

○古物の偽造 米國にては從來古物を偽造して博物館などへ賣付るとはまゝあるとなるが現にフ<sup>#</sup>ラデルフィヤにても古代人種の烟管、皿、儀式用器具等を製造し又他所にても陶器等を製造し何々の地にて掘出せしものなりとて賣買し居る由我國博物館等にて此の如き古物類を購求せらるゝときは注意せらるべきとにこそ

○光の一位 從來光の強さを計る標準は甚だ不完全にして強度及び色の二點に於て全く齊一なるものなかりしが此度佛國にて開きし萬國電氣學者の集會にて取極めし標準は已に三年前ヴ<sup>#</sup>アル氏が目論見しものにていと此目的に適せりとそは融解したる白金の將小凝固せんとするとき(攝氏千七百七十五度)其一平方センチメートルより射出する光にて幾んど白熾電氣光に類すと云ふ

○萬國醫學協會 過般典赫コーペンヘーゲンに於て開きし題號の會は甚だ盛大にして同國皇帝陛下を始め歐米諸國より參集せし者千五百名程ありしと會長其他諸名家の演說ありしが中にもサー、ウ<sup>#</sup>リヤム、ガル氏の英國醫學會の共同研究委員に代り萬國共同病理研究の事を述べられたれば會員は一同大に之を賛成一遂に共同病理研究の萬國常置委員を置くことに決したり尙ほ次會は千八百八十七年九月北米ワシントン府にて開くとよ決せりと云ふ

○パストール氏狂犬毒の試験 前號に記載したる佛國狂犬毒試験委員は第一報告を政府に呈しパストール氏の説の全く誤なきを保證したり今其試験の結果を聞くふパ

ストール氏の已に稀釋狂犬毒を種へ置きたる二十三匹の

かるべしと云へり此の如く好評を得たるハ元來本邦森林



らるゝときは注意せらるべきとにこそ

ストール氏の已に稀釋狂犬毒を種へ置きたる二十三匹の犬はいと強き毒を受けたれども皆別状なかりしが之に反して未だ稀釋毒を種へざる通常の犬十五匹ハ過半毒も感じたり其内六匹は狂犬に噛まれしが内三匹は狂犬となれり次の八匹は毒を靜脈内に受け皆狂犬となり又殘る五匹ハ通常種痘の法より毒を種へたれば是も亦悉皆狂犬となれりされをパストール氏の説は確乎不拔なるを疑なし向後委員は新ふ多くの犬に稀釋毒を種へ種毒せざるものと比較し又已に狂犬に噛まれたる後稀釋毒を種るも其効あるや否やを研究せらるべしと云ふ

○我邦林産の名譽 當夏エデンボロに開きたる萬國森林博覽會へ我邦より出せし品物は少々延著せしが縦覽人は日々其到着を待居りたる由而して其着後我事務官が神速に之を陳列したるいと衆人の感賞せし所なりと又全體の裝置も至極宜を得何事も萬事評判よろしくネーチェールの記者の如きハ同雜誌に委く日本の部と評し藥用草根木皮等の出品の少きは遺憾なるが總体甚た面白く且つ利益多きものにして歐米の山林家と雖就て學ぶべきと多

の全く誤なきを保證したり今其試験の結果を聞くふパ

かるべしと云へり此の如く好評を得たるハ元來本邦森林の産物に富めるに由ると雖亦當局者の盡力至らざるところなかりしによるならん

○理醫學講談會 同會の第四會は去月廿日と以て東京大學理學部講義室に於て開會せられ關谷清景氏にハ地震談を北尾次郎氏には光の分析を講説され、第五會(十月五日)には岩佐巖氏礦山衛生の概略を高松豊吉氏石炭瓦斯の説を講述され又第六會ハ去る十八日を以て催され岩谷立太郎氏には水の説を、梅錦之丞氏ハ眼の養生を説かれ何れも夥しき實驗を以て説明されたれば至極解し易く且つ面白きとにてありし又當期中の残り三回の演題並に講談者は十一月第一日曜日(動物組織の説箕作佳吉氏、波動の説村岡範爲馳氏、十一月第三土曜日)耳の説宇野朗氏、「テレフォン」の説山川健次郎氏、十二月第一日曜日(肺病の説三宅秀氏、手足の説松原新之助氏)の由なり

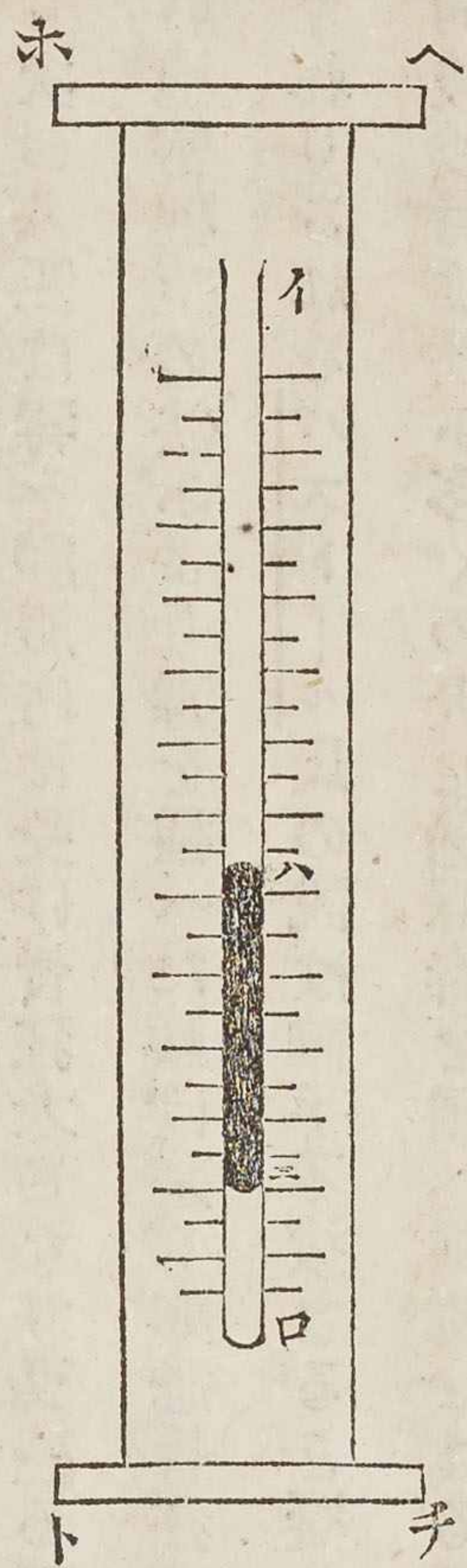
○東京物理學校 曾て本誌に掲載せし東京物理學校ハ去月十五日の強風ふて大破よ及び之が爲に暫時休業せる後假に九段坂下公園地内共立統計學校を夜間借受け定規の



授業と始めたるに入學者已に七十名に垂んとし恰も昨年  
比二倍數なる由是を祝して風ヒロガリとでも申すべきか  
併し是等の些事も邦人の理學思想進歩の一端なりとせば  
甚賀すべきにこそ

○集談會 東京大學醫學部教授、助教授及ヒ醫學士諸君  
ハ題名ノ如キ會ヲ開設セラレタリ其目的ハ會員各々其專  
修ノ學科ニ關スル新聞雜誌類ノ報告ヲ擔當シテ簡單ニ報  
道シ其他自家ノ實驗等ヲ演述スルニ在リト

○(ボイレン氏ノ定則ヲ示ス簡單ノ法) 直徑一ミリメートル  
長サ千ミリメートル計ニシテ一端ヲ閉チタル玻璃管(イ



ロ)ノ中ニ水銀柱(ハニ)ヲ入レ圖ノ如ク垂直ニ立テ、(ニ  
ロ)ノ長サヲ計リ然ル後之ヲ倒立スレハ(ニ)ハ他処(ノニ)  
ニ到ルヘシ而シテ(ロニ)ト(ロノニ)ノ長サハ必ス左ノ如  
キ比例ニ適スルナリ

(ロリ)。(ロリ) || 760 (ソリ)。(ソリ)。(ソリ)

例へハ水銀柱ノ長サ二百五十三ミリメートルナルハ(ロ  
ノニ)ハ凡ソ(ロニ)ノ二倍トナルベシ○右ノ裝置ヲ板ニ固  
定シ尺度ヲ附シ且(ホへ)及ヒ(トチ)ナル臺ヲ備フレハ倒  
置ニ便ニシテ且ツ何時ニテモ用ユルヲ得ヘシ(ウ)一デ  
マン理化新聞)

○關賞牌 東京數學物理學會ニ於テハ兼テ關孝和先生ノ  
名ヲ博スル爲關賞牌ヲ起スノ企アリシカ今回愈々着手ノ  
積リニテ左ノ規則ヲ議定セリ

關賞牌規則

第一條

關賞牌ハ關先生ノ芳名ヲ不朽ニ傳ヘ且數學ノ進歩ヲ獎勵  
スル爲メニ數學上功績アル本邦人ニ授與スル者トス

第二條

關賞牌ノ資金ハ有志者ノ義捐金ヨリ成ル者ニシテ東京數  
學物理學會ノ所有ニ屬スル者トス

第三條

賞牌ヲ造ルノ費用ハ總テ資金ノ利子ヲ以テ仕拂フヘク何

等ノ事故アルモ資金ヲ消費スルヲ得サルモノトス

委員五名ヲ撰ヒ候補者ノ事業ヲ審査シ詳カニ分析シテ之



キ比例ニ適スルナリ

等ノ事故アルモ資金ヲ消費スルコトヲ得サルモノトス

但シ資金ノ利子ハ賞牌ニ關セサル事ニ使用スルコトヲ得ス

第四條

賞牌ノ重サハ必若干勿ニシテ其地金ノ成分ハ金九銅一ノモノタルヘシ

第五條

賞牌ノ資金ハ東京數學物理學會委員長ノ名ヲ以テ驛遞局ニ預ケ置クヘキモノトス

第六條

賞牌ヲ授與シ得ヘキ時期ノ前一年ニ於テ東京數學物理學會事務委員ハ授與スヘキ人ノ有無ヲ調査シ其人アリト認ムルトキハ其學業功績等ヲ本會ニ報告シテ之ヲ推舉スヘシ

但シ本會通常會員ニシテ候補者ヲ推舉セント欲スルトキハ四人以上聯合スルコトヲ要ス

第七條

前條ノ場合ニ於テハ東京數學物理學會ハ投票ヲ以テ審査

賞牌ヲ造ルノ費用ハ總テ資金ノ利子ヲ以テ仕拂フヘク何

委員五名ヲ撰ヒ候補者ノ事業ヲ審査シ詳カニ分析シテ之ヲ本會ニ報告セシムヘシ

第八條

前條審査委員ノ報告ハ討議ニ附セス直ニ無名投票ヲ行ヒ可票ノ數否票ノ數ノ九倍或ハ九倍以上ナルトキハ東京數學物理學會ノ名ヲ以テ賞牌ヲ授與スヘシ

第九條

同人ニシテ二回賞牌ヲ受ルコトヲ得サルモノトス

第十條

賞牌鑄造并ニ授與ノ手續ハ其時々之ヲ定ムヘシ

第十一條

此規則ノ變更増減ハ一ニ本會正則第二十五條ノ手續ニ依ルヘシ

但シ第一條ヨリ第四條迄ハ之ヲ變更増減スルヲ得ス

○ヘンリー、ウァット氏 同氏ハ英國ローヤル、ソサイエ

テキーノ會員ニシテ化學辭書等ノ大著述ヲナシタル化學者ナリシガ去ル六月卅日暫クノ病氣後卒倒症ニテ死去セラレタリ



學士ノ勳爵 英國女帝陛下ハバルンハールド、サミウエル  
ソン君ニハ男爵ロスコ―教授ニハ勳爵士ノ位ヲ與ヘラレ  
タリ但シ兩氏共工藝教育ノ委員トナラレテ功勞アリシガ  
爲メナリ(ネ―チツール)

○故人エム、ヂツマ氏 余ハ委員長エム、パスチツール氏ヨ  
リヂツマ氏ノ記念ノ爲メ其產地ナルアレ―ニ於テ肖像ヲ  
設立スル企アリトノ書ヲ受取レリ夫レヂツマ氏ノ名タル  
ヤ化學ノ歷史上最高位ヲ占メタルモノナレバ余ハ其企ヲ  
賛成スルニ別ニ一語ヲ費ステ要セズ余ハ唯英國ノ化學者  
ノ多數ガ喜ンデ此舉ヲ補助センコトヲ望ムノミ但シ賛成者  
ハ其醜金ヲピカデヰリバルリングトン、ハウス宛ニテ化學  
會ノ書記ニ送ルベシ

タグリッ、エッチ、パルクキン(ネ―チツール)

正誤 當雜誌第三十號雜報欄内ニ東京化學會譯語會云々  
ノ事ヲ記セシガ全ク傳聞ノ誤ニテ更ニ左様ナル事實アラ  
サル由ナレハ茲ニ之ヲ正誤ス

雜 錄

大不列顛理學獎勵會モントリオール會ノ景況

菊池大麓氏日記抄錄

大不列顛理學獎勵會ハ理學ヲ世ニ擴張セン爲メニ設ク  
ルモノニシテ毎年地ヲ換ヘテ集會スルヲ例トス其創立  
ヨリ既ニ五十四年ノ久シキニ及ヘ英國中ノミニテ集  
會シ其重ナル都府ハ殆ント至ラサル所ナシト云フ今年  
ハ始メテ亞米利加カナダ領州ノ招ヲ受ケ其一都府モン  
トリオールニ集會スル由ナルハ既ニ當雜誌中ニモ記載  
シタルカ大西洋ヲ越ヘ數千里外ヘ旅行シタル上ニテ會  
スルコトナレハ或ハ微々タル集會ニハ有ラサルヤト英國  
及カナダニテモ人々皆大ニ心配シタル由ニテ殊ニカナ  
ダニテハ其接待等ニ非常ニ注意ヲ加ヘタルカ去ル九月  
下旬愈開會ニ及ヒシニ案外ノ盛會ニテ參集シタルモノ  
千八百人ニ及ヒタリト云フ過般米國ニ赴レタル菊池大  
麓氏モ恰モ其地ニ至リシヲ以テ此會ニ臨席セラレ近頃  
其親戚ニ送ラレタル日記ヲ見ルニ略其景況ヲ見ルニ足  
レリ因テ請フテ此ニ抄録ス但シ此日記ハ菊池氏自家ノ  
起居ヲ記シタルモノニシテ偶此會ニ及ヒタル迄ニテ專

ラ此事ヲ記シタルモノニアラサレハ看者之ヲ諒ヨセ

ントリオール會ニ赴ク人ニシテ此船ニ適スルヨリ數倍多ク



ラ此事ヲ記シタルモノニアラサレハ看者之ヲ諒ヨセ

(編輯人白)

八月廿五日午後三時十五分メンデンホール氏(曾テ東京大學教官ナリ)ト共ニ瀨車ニテトロントヘ往ク車中ニテ判事スタロー(Concepts of Modern Physicsノ作者)及ヒ其令嬢ニ面ス氏ハ頗ル矍鑠タル老人ナリ亦モントリオールノ會ニ赴ク也夜七時トロントニ達シ此處ニテ別瀨車ニ移リキングストンニ往ク乗客甚ダ多クシテ眠車ナク頗ル困難ナリカナダ州ロンドンノ教官サンダルスニ遇フ此人ハ應用植物學者ナリ津田仙氏ヲ知レリト云フ後モントリオールニテ其著シタル所ノ有害蟲ノ書ヲ贈レリ

廿六日朝四時頃キングストンニ達ス此處ニテオンタリオ湖ノ船ニ乗り込ム可キ處昨夜來風雨烈シク船未ダ着セス故ニ英米ホテルニテ一晷スヒツクス(英物理學者)及ヒマカリスタル(英國數學者)ニ逢フメンデンホール氏ハ此處ヨリ瀨車ニテ先ニモントリオールヘ往ク余ハ正午十二時船ニ乗り込ム湖水ヨリシントローレンス河ニ入り有名ナル千島ノ風景ヲ眺望シナカラ河ヲ下ル此船ノ乗客ハ皆モ

奈 鏡

起居ヲ記シタルモノニシテ偶此會ニ及ヒタル迄ニテ專

ントリオール會ニ赴ク人ニシテ此船ニ適スルヨリ數倍多クノ雜踏ヲ極メタリ夜ロンスト云ヘル早瀨ヲ通り十一時頃コトニ泊ス船中寢室ハ皆既ニ先約ニテ得難ク漸クケツト一枚ヲ得テ船ノユカ上ニゴロ子シタリ甲板上同様ノ人ニテ滿々タリ食事ノトキハ其混雜云フ可ラス更ニ眠ル能ハス

廿七日朝五時コトヲ出テ直ニ第三ノ早瀨ヲ過キ七時過ラシーヌト稱スル有名ノ早瀨ニ至ル此處ニテ土人(インヂヤン)ノ水先案内乗り込ミタリ是ハ純乎洋服ヲ着シタレハ土人カ何タカ分チ難シ此早瀨ハ極テ急流ニシテ岩石多ク峙チ頗ル難所ナリ此船ニ下ル路ニテノ一大奇觀ナリ八時過モントリオールニ達ス有名ナルピクトリヤ橋ノ下ヲ經此橋ノ長サニ英哩余アリ其水面ヨリノ高サ推シテ知ルヘシ是ヨリ上陸シウングルホテルニ至ルメンデンホール氏ハ昨夜此ニ來リ辛クシテ一室ヲ借り得タリトテ此ニ同寓ス船中ノ困難ニテ大ニ疲レタル故朝飯後二時マテ眠リタリ其ヨリ起出テ數多ノ人ニ接ス就中高名ナルユーマシス、ニューコム、(天文學者)デワール、マツケリン、ボビ



一、サムソン等アリ其他ハ一々記サスバ―カ―(化學者)ノ

紹介ニテ大不列顛理學獎勵會ノ會員トナリ遂ニ通常委員

ニ擧ケラレタリ其利益甚タ多シ殊ニ集會ノ節ハ善キ席ヲ

得ルヲ其一トス四時半クウーンスホールト云フ所ニテ當

府知事カ會員ノ來臨ヲ謝スル禮式アリツルウ井ルリヤム

トムソン會員ニ代リテ答禮ス終リテ歸リ夜食ス此ニテモ

人數多ク頗ル混雜ス八時又々クイーンズホールニ至ル但

シ此時ハ燕尾服ヲ着用セリ會長ケ―レ―氏不參セルヲ以

テトムソン氏代リテ會長ノ席ニ付クカナダ總奉行ランズ

ダオン侯ノ演述アリ夫ヨリトムソン立テ席ヲロ―ドレ―

レ―(Lord Rayleigh)ニ讓ルレ―レ―氏立テ近時物理學

進歩ノ一ニ就キ演述シ終ニ一般理學教育ノ事ニ論及ス極

テ面白カリシ十時半比終リテ歸ル此日舊知己ノ内マカリ

スター、ヒツクス、ハドソン及ビチャプリンニ逢フニユ―

ヘブンノ教授ブリユ―ア―氏家弟ノ知人ナル由ニテ面會

ス

廿八日午前十時食終リテマギル大學校中今度ノ集會所ニ

至ル明夜ク井ベツクノ集會ノ切符ヲ求ム夫ヨリA部即チ

數學物理學部ニ至リ本部會長ツルウ井ルリヤムトムソン

ノ演說ヲ聞キ夫ヨリB部(化學)ニ至リロスコー氏ノ演說

ヲ聞カントスレモ己ニ人數充滿ソ入ヲ得ス故ニG部(工

學)ニ至リ夫ヨリ又A部ニ還リ種々ノ論說ヲ聞ク三時頃

出テアダムス氏(地質學者)ヲ訪フ同所ニテシヨンスホプ

キンス大學校教授ウ井ルリヤムス氏(鑛物學者)ニ面會ス

夫ヨリボルランド氏ヲ訪フニ不在ナリケレハ直ニホテル

ニ歸ル夜食後大學校ノ夜會ニ至ル多人數ニテ混雜極レリ

奉行ランズダウン侯ニ對面ス此ハ唯禮式ナリ大學總理ド

ウソン氏ニモ對面ス又札幌ニ教師タリシペンホロ―氏及

其妻ニ逢フ其他數人ニ接シタレモ一々記サス數學物理學

會會員荒川氏ノ弟當所ニ來會セルニ逢ヘリ

廿九日朝九時比ヨリ集會所ニ至リク井ベツクヘ往ク可キ

漁船中ノ部屋切符ヲ請取リ夫ヨリA部ニ至リ演說及ヒ討

論ヲ聽ク(一時間程晝食ノ爲ニ休ム)終リテホテルニ歸リ

勿々夜食シ夫ヨリアダムス氏ノ招キニ應シ其家ニ至ル共

ニクイーンズホールニ至リロツヂ氏ノ塵埃ノ一ニ就キ通

俗演說ヲ爲スヲ聽ケリ十時比終リテホテルニ歸リ十時半

ク井ベツクヘノ漁船ニ乘リ込ム十一時過發ス今日終日雨

スル燈級アリ崖ノ一端ニ板ヲ以テ運動場(清水舞臺ノ類)



至ル明夜ク井ベツクノ集會ノ切符ヲ求ム夫ヨリA部即チ

俗演説ヲ爲スヲ聽ケリ十時比終リテホテルニ歸リ十時半

ク井ベツクヘノ汽船ニ乗リ込ム十一時過發ス今日終日雨  
フル暑サハ頗ル甚シケレモ八十度以下ナルベシ本日森氏  
ノ書狀ヲトムツン氏ニ渡ス

スル磴級アリ崖ノ一端ニ板ヲ以テ運動場(清水舞臺ノ類)  
ヲ作り毎夕樂ヲ奏シ公衆ノ樂ミニ供ス九時比夜食シサン  
ダースト共ニ城内カナダ總奉行ノ夜會ニ赴ク城ハ府ノ最

州日朝早起河ヲ眺望ス雨降ル十時ク井ベツクニ着ス此路  
程凡ソ百八十哩ナルヘシ當府知事船ニ來リ會員來着ノ祝  
辭ヲ述フ會長レレレ氏答辭ヲナス終リテ汽船ヲ乘換ユ

モ高キ所ニアリテ河ヲ見下シ頗ル絶景ナル由十一時半比  
汽船ニ乗リ込ミ直ニ眠リタレハ十二時半比出船シタルヲ  
モ知ラサリシ船中ニテモレレ及ヒプリンプトン(先年

此時天氣漸ク晴ルニ艘繫合セタル汽船ニテ少シク河ヲ下  
リ遠クモンモレンシ瀑布ヲ望ム此瀑布ハ高サ二百五十尺  
程ニテ直ニローレンス河ヘ落チ降レリ夫ヨリ造船所及波

逢フ舊知己或ハ其他家弟ノ知人或ハ他ノ日本人ヲ知リタ  
ル人等數名ニ逢ヘモ一々記サス「ツルウ井ルリヤムトム  
ツン氏ト談話ス

止場ノ築造中ナルヲ一見ス一時比ク井ベツクヘ上陸ス夫  
ヨリ二時半午餐ノ饗應アリテ後ク井ベツク即チ下カナダ  
奉行ノ官邸ニテ園會アリ余ハサンダース、ブレイデー(英

州一日朝九時起キテマーチン氏(生理學者)及ヒロスコー  
氏(化學者)ト談話ス一時半比モントリオールニ着ストム  
ツン先生重キ荷物ヲ兩手ニ持チビツコヲ引キ々上陸スル

國チヤルレンシヤイ報告中有孔蟲ノ事ヲ記シタル人)及  
ヒ外一人ト馬車ニ乘リテ之ニ赴ク(凡ソ二哩)六時比迄園  
中ヲ逍遙シ遂ニ隣家ナルデモインスト云フ人ヲ訪フ園中

ヲ見テ餘リ氣ノ毒ナレバ之ヲ助ケ夫ヨリチヤプリン氏ト  
共ニ歩シテ二時過ウインゾルホテルニ歸リタリ此行ハ甚  
ダ愉快ノ事多シ就中諸ノ有名ナル大家及ヒ舊知己ニ逢ヒ

ニ葡萄ヲ作ル室アリ其手入方等實ニ至レリ實ノ大サ七分  
余アリ夫ヨリ市中ヲ散歩ス此府ノ家屋ハ極テ古風ニシテ  
重モニ高崖ノ上ニアリ馬車ノ往來スル坂路アリ人ノ上下

タルコ其樂ノ最ナルモノナリ  
一昨日ノ討論中シルベナス、トムツン氏カウ井ルリヤ



ムトムツン氏及ヒロツチ氏ノ爲メニ閉口サセラレタル様  
ナドハ頗ル面白カリシ總ヘテ此會ニ來リタル爲メ得タル  
所ノ利益實ニ鮮カラス

九月一日 九時後集會ヘ趣キA部ニテ講談ヲ聞キ又G部

ヘモ往キタリ三時半去リテ荒川ヲ訪ヒシニ不在ナレハ旅

寓ニ歸リタリ夜八時荒川訪來ス終ニ相伴フテクイーンズ

ホールニ往キダリンヂヤ―氏(英國生物學者)ノ下等微細

動物ノコニ就キ演説スルヲ聞ケリ頗ル面白シ倫敦ロイヤ

ルスクールオフマインズノ教授ロベルト氏ニ面接ス豊原

及ヒ小花ノ知人ナリ云フ又パットン氏(米動物學者)ニ會

ス此人ハ家弟ノ知人ナリ其他諸名家ニ遇ヒタレ一々記

サス

二日 九時半集會所ヘ赴ク今日ハA部ヲ數學ト物理學ノ

二部ニ小分ス海王星ノ發見者アダムス氏ニユートンノ手

記ヲ示セリポール氏 Cylindroid ( $z(x^2+y^2) - 2mxy = 0$ )ノ

模形ヲ見セタルカ極メテ面白シ物理學ニハフ―ゴ―ブス氏

ノ赤色光線ト綠色光線ノ速率ノ差ノ有無及ヒマツクリン

氏ノ試験ニ付テノ討論アリトムツン氏トレ―レ―氏ト

Group Vel. 及ヒ Wave Vel. ニ就キテノ議論ハ格別ニ面  
白ク思ハレタリ今日園會等アリタレハ雜踏ノ甚シキノミ  
ニテ別ニ所得モナケレハ往カサリシ六時十五分ノ瀟車ニ  
テモントリオールヲ去ル

菊池氏ノ日記中大不列顛理學獎勵會ノコハ此ニテ止

マレリ

かんたんなる ぶつりの 志けん。

ごどれ まきた。

志けん の 一。 ながさ 二。 ちやく ばか。

りの ふとき もめんいと の ひとつ の はま

にてんぼれせん れ くくりつけ たの はま れ

てのひら にて より てんぼれせん れ すみやかに

まわす とき わ られ が ついにわ たいら にな

なる。(たなか 志とく うぢ。)

志けん の 二。 よるぎ つまみ の ある

どびん の ふた れ とり つまみ に ながさ 二

ちやく ばかりの ちよれぶなる いと れ ちよつかり

と くくりつけ ちよるのち これ れ つまみ に

まきつけ の あまり れ みぎ の て に もち

あなた に さまごむ べま。 ちよるときわ けひり



まきつけろの あまり ね みぎの て に もち  
 ふた ね はなす べえ。 志かるときわ ふたが  
 まわり ながら くだり いとが のこらず とけ  
 たる のち わ いとが いぜん と はんたい に  
 まきつきて ふたが もと の ところ の すこえ  
 志た まで のぼる。 ふた わ ふたたび くだりて  
 ふたたび のぼる。 むくの ことく する こと  
 志ばらく つづき ふた の のぼる こと だんだん  
 すくなく なり ついにわ ろの うんぞね やむ。  
 志かま いとの とける とき いと ね もつた  
 る て ね あげ ろの まきつく とき て ね  
 さげる とき わ ふた の うんぞね いつまでも  
 やむ こと なえ。

志けん の 三. すきとれりたる ふらすこ

の くち ね あつがみ にて ねをい これ に  
 きせる の すいくち の とれる だけ の あな  
 ね あげ たばこ ね きせる に つめ ひ ね  
 つけて よく すいたる のち ろの すいくち ね

あな に さえこむ べえ。 志かるときわ けむり  
 が ひもの ことく なりて くだり うれ に  
 ふちが いくつも でき これ が ついにわ  
 の かたち となり あと に できたる ものが  
 さきに できたる もの ね くぐる。  
 この 志けん にわ らんぶ の ほや の ひと  
 つの くち ね よく ふさぎたる もの ね も  
 ちいて も よえ。

志けん の 四. とつぷ に たばこの

けむり ね みたえ きせる の すいくち ほどの  
 あな ある あつがみ にて これ ね ねをい き  
 せる あるいわ ゆび にて この かみ ね どん  
 どん と つづけて うつ とき わ ねねくの  
 けむりの わが あな より てる。 これ と  
 ぞねに くるき わが こつぷ の なか ね  
 くだる。

志けん の 五. だい 三 の 志けん の

ことく なえ ゆび ね ふらすこ の くび の



よこがわにふれこれねあたためるときわ  
けむりのひもがらのところよりとれざ  
かりゆみなりはまがる。

○

アドルフ、ウルツ氏ノ略傳

此文ハ六月十九日發兌ノネーチウールニ載セタル  
有名ナル佛國ノ化學家ノ傳ノ前半ヲ抄譯セシモノ  
ナリ

磯野徳三郎

去ル五月十二日ニアドルフ、ウルツ氏死セリ其死ニ依リ  
世界特ニ理學世界ハ最モ著ク最モカアル首領即チ新式化  
學ノ發達ノ初年ナル化學歴史上最モ困難ノ時代ヲ經テ功  
績赫々タル首領ノ一人ヲ失ヘリ氏ノ鬼籍ニ付クヤ甚タ忽  
焉ニシテ且ツ箕裘ヲ襲フタル氏ノ師友ヂウマ氏ノ死ニ接  
近シタルヲ以テ悼惜ノ情更ニ切ナリトス

チャー—ルスアドルフウルツ氏ハ新教僧徒ノ子ニシテ千八  
百十七年十一月二十六日ニ於テストラスバルグ近傍ノウ  
ルフシ—ムニ生ル氏ハストラスバルグノ大學校醫學部ニ  
業ヲ受ケ千八百四十三年ニドクトルノ稱號ヲ得タリ千八

百四十四年ニ巴里ニ往キ直ニヂウマ氏ノ注視スル所トナ  
リエコール、サントラル及ヒ醫學部ニ於テ陸續數多ノ位  
置ヲ占メタル後遂ニヴェルリ—ニルノ農學校ノ教授ニ任セ  
ラレ千八百五十三年ニ醫學部ノ教授トナリヂウマオルフ  
井ラ兩氏ノ教ヲ繼ゲリ

眞理ヲ探究スル爲メ現ハス所ノ思想ノ活發ト耐忍ノ不拔  
ナルトニ於テ氏ハゴ—ル及ヒチウトノ種屬ノ善性ヲ兼有  
セリ千八百五十六年ニ醫學專門校ノ校員ニ撰舉セラレ千  
八百六十五年ニ於テ化學的研究ノ賞トシテ二萬フランク  
ノ金ヲ得千八百六十六年ニ醫學部ノ教員長トナリ千八百  
七十八年ニソルボンニ於テ教授ニ任セラレ茲ニローヤル、  
インステ井テ井シ井ニ於テファラデ—講義ヲナセリ蓋シ  
講義ノ題ハ氣體ノ凝縮ニシテ當時ノ傍聽者ハ氏ノ熱心及  
ヒ快活(特ニ液化セル氣體(アムモニヤ)ノ現ハレタル片)  
ト氏カ大呼セル「御覽ナサイ茲ニ液体カアリマス」等ノ語  
トノ感覺ヲ容易ニ失ハザルベシ  
氏ノ目的ニ熱心ナル加フルニ言行動作ノ愉快ナルアリ故  
ニ氏ト共ニ事ヲ爲スノ學生ハ皆氏ニ心服セリ而シテ氏ノ

獎勵及ヒ指揮ノ下ニ立テ學術上ニ功ヲ奏セシ學生ノ數ハ

氏ノ立論ノ精密ナル化學ノ教ヘラル、所執レノ國トシテ



業ヲ受ケ千八百四十三年ニ下クトルノ稱號ヲ得タリ千八

ニ氏ト共ニ事ヲ爲スノ學生ハ皆氏ニ心服セリ而シテ氏ノ

獎勵及ヒ指揮ノ下ニ立テ學術上ニ功ヲ奏セシ學生ノ數ハ  
殆ト枚舉スルニ暇アラズ  
然レ氏ハ嘗ニ氏ノ門下ニ來ル所ノ生徒ヲ誘掖勸導セシ  
ノミナラズ又理學ノ知識ヲ世ニ擴張スルコトニ力ヲ盡シテ  
其功績甚タ著シ

教授ノ重任ニ加フルニ氏ハ千八百八十一年ニ永久議官ニ  
撰擧セラレ環癰發出及ヒ理學教育ノ委員トナリテ其報告  
書ニ記スル所ヲ看ルニ最モ貴重ナル功勞ヲ國ニ盡セリ  
化學者ノアラン限リハアドルフ、ウルツ氏ノ事跡ハ吾人  
ノ理學ニ於テ更ニ廣闊重要ナル事實ヲ發見スルノ指南車  
ニ供スベシ

ローヤル、ソサイエテヤノ理學上ノ論文ノ目錄ヲ看ルニ  
アドルフ、ウルツノ名ノミテ記スルモノ百四個ニ下ラズ  
而シテ其多分ハ理論上ニ樞要ニシテ氏ヲシテ化學ノ基礎  
ヲ創立セル英士中ノ一人タラシムル結果ヲ來タセシ研究  
ノ委細ヲ記セシモノナリ佛國ノ化學者ニ取リテハ其頭領  
ノ一人ヲ失ヒ之ヲ大ニスレハ理學世界モ亦其頭領ヲ失フ  
タリト云フベシ氏ノ思想ノ明亮ナル氏ノ意見ノ廣遠ナル

氏ノ立論ノ精密ナル化學ノ教ヘラル、所孰レノ國トシテ  
氏ノ恩澤ニ浴セザルハナシ夫レ世界萬國ノ化學家ノ勞力  
ニ依テ實ニ驚クベキノ速度ヲ以テ事實ノ鴻荒ヲ開發スル  
ノ今日ニ當リテ氏ノ如ク概括力ニ富ミタル一大豪傑ヲ失  
フコト豈ニ悲マザルヲ得ンヤ氏カ著述中化哲學ノ緒言化學  
理論史及ヒ原子論ハ皆英語ニ翻譯セラレタルモノニシテ  
氏ノ教授法ノ適例トナスヘク而シテ化學ノ進化史ヲ學フ  
ノ楷梯トシテ實ニ古今無比ノ良書ナリ 後略

譯者云ク先ツ有名ナルヂウマ氏ノ傳ヲ出シ次ニ此傳  
ヲ掲クルカ順ナレ共都合ニヨリ此ヲ先ニシ彼ヲ次號  
ニ讓ル

### 學會記事

○東京化學會記事 明治十七年九月廿日午后二時ヨリ例  
場ニ會ス農商務省工務局ヨリ同局月報第二十三號ヨリ  
第二十六號迄四冊ヲ、工學會ヨリ工學叢誌第三十卷ヨリ  
第三十二卷迄三冊ヲ、理學協會ヨリ同會雜誌第七卷及ヒ  
第八卷ヲ、會員杉田玄端氏ヨリ和蘭化學辭書一部ヲ、會員  
高松豐吉氏ヨリ「ゼ、ヂョルナル、オフ、ゼ、ソサイエテヤ」、  
オフ、ケミカル、インダストリ」本年三月ヨリ六月迄ノ分



四冊ヲ本會ヘ寄贈セラレタリ「會計掛織田顯次郎氏前年  
度ニ係ル會計ノ報告ヲナス」次ニ吉田彦六郎氏漆灰ノ説  
ヲ演述ス次ニ吉武榮之進氏毒ウツギ毒質試験ノ説ヲ述ブ  
此日出席會員十五名ナリ

○東京數學物理學會 九月十三日午後一時半ヨリ東京大  
學理學部ニ於テ常會ヲ開ク「兼テ山川川北村岡ノ三氏ヨ  
リ立案ニナリタル關賞牌規則ヲ議スル」數條ニ到リタル  
ニ修正案區々ナルヲ以テ更ニ委員ヲ撰ヒ本日議決セル精  
神ニ依リ後條ヲ再調スル「ニ決シ山川村岡寺尾ノ三氏當  
撰」寺尾壽君ハ楔形平截面ノ論ヲ隈本有尙君ハ記號的す  
けいらる立方式小引ヲ北尾次郎君ハ壓縮スヘキ流体中ニ  
於テノ球ノ運動論ヲ演述セラレ各々討議質問等アリタリ  
十月四日午後一時半例場ニ會ス「關賞牌規則再調案及ヒ  
數學譯語會草案ヲ議了ス」數學譯語ハ前數學會ニ於テ議  
定セル代數譯語ノ後次キ平岡氏ノ英語原案ニ猶佛獨逸  
ノ兩語ヲ加フル「トシ三輪氏ハ佛語委員ニ村岡氏ハ獨逸  
語委員ニ當撰セリ」理學協會ヨリ同會雜誌第七號八號ヲ  
寄贈セラレタリ「川北氏ハ解惑一問(數學會社雜誌第八號  
八套ノ三ニ兩術ナキヲ認メタル萩原禎助氏ノ解説)ヲ難  
波氏ハ光ノ單位ヲ村岡氏ハ原標電池ヲ報告セラレ各々討  
論質議アリタリ

○哲學會記事 本會ハ先月二十二日東京大學ニ於テ通常  
會ヲ開ク寺田福壽君佛教ト理學トノ關係ヲ論スト云フ題  
ニテ演説アリ本月二十日又例場ニ於テ開會アリ加藤弘之

君男ノ女ヲ壓スルノ要小崎弘道君基督教ヲ信スルノ理由  
ト云フ題ニテ各演説アリ

雜 錄

鼈 瘕 記

江沼元五郎遺稿

世傳丹羽長秀疾腹痛。如蟲嚙臟腑者。乃切齒曰。大丈夫豈  
徒困于二豎哉。因引刀自刎腹。探得蟲。狀如鼈。長秀既死。  
豐太閤親檢之。命典醫武田法印。藥殺其蟲而藏之。所謂鼈  
瘕者是也。頃者。某携來眎予。且請鑿識焉受而視之。体肉朽  
壤。匿存骸骨。其為數百年前之物無疑矣。然是蟻龜之小者  
耳。固非腸中之蟲也。而謂之長秀腹中所得者。豈出於好事  
者之為耶。不則長秀之苦計也。夫織田右府之遇弒。諸將相  
猜。物情恟々。而兵馬之權遂歸豐太閤。太閤視織田遺子不  
啻孤豚。當是時。雄如柴田。猛如瀧川。前後舉義。聞織田氏  
再興。而皆取敗滅。長秀有見于此。隱忍含垢。欲待時機之至  
有所為而太閤之業日熾。無復可乘之時矣。於是乎憤懣不能  
措。是其所以死而不顧也。其托諸病者。致太閤猜疑。以累織  
田之遺孤也。若為痛苦之不勝而自刃邪。狂癡人之為而已。  
安在其為長秀乎。予故曰。所謂鼈瘕者。非好事者之為則長  
秀之苦計也。若夫以鼈瘕為腸中之蟲者。誤之甚者。固不待  
辨也作鼈瘕說。